研究資料

珊瑚会資料集

菊屋吉生・塩谷　純編

珊瑚会は大正期、日本画家を中心に活動した小団体である。大正四（一九一五）年、平福百穂を中心に池田永治（牛歩）、小川芋銭、小川千甕、川端龍子、鶴田吾郎、名取春仙、山村耕花の八名によって結成され、同一三年までの間に一〇回の展覧会を開催した。途中森田恒友、近藤浩一路、石塚翰が加わり、活動末期には酒井三良、岡本一平が展覧会に出品している。いわゆる日本画を発表していたとはいえ、小川芋銭や川端龍子らかつて洋画教育を受けた者や鶴田吾郎のようなれっきとした洋画家、あるいは岡本一平・池田永治といった漫画家という具合に一筋縄でいかない顔ぶれであり、個人的な交友関係をもとに趣味と研究を等分に持ち寄った、きわめて自由な交流の場であったようだ。

同会については、明治期に自然主義を標榜した无声会との繋がり（添田達嶺『明治大正日本画史』私家版　昭和三〇年一〇月）や、大正期に勃興したいわゆる新南画としての位置付け（酒井哲朗「大正期における南画の再評価について　新南画をめぐって」『宮城県美術館研究紀要』三号　昭和六三年三月）、あるいは文学との関わり（山梨県立文学館・山梨県立美術館『画文交響　飯田蛇笏をめぐる画人たち』展図録　平成一〇年四月）といった視点からすでに関心が持たれてきた。またメンバーの中には平福百穂や小川芋銭、川端龍子等、画集や展覧会に頻繁に取り上げられる画家もおり、作家研究の立場から言及されることも多かった。しかしながら、同会は展覧会目録や会誌といったものがあるわけでもなく、その全貌は杳として掴み得ない状態であった。

そこで東京文化財研究所では、平成一三年度から行っている中期計画「昭和前期を中心とする日本近代美術の発達に関する調査研究」の一環として珊瑚会の資料収集を企図し、すでに「明治から大正期にかけての自然主義の変容」というテーマで珊瑚会の研究を進めていた菊屋吉生（山口大学）をはじめ、珊瑚会出品作家およびその周辺の研究で成果をあげている諸氏を招いて、平成一三年八月六日、当研究所において研究会を開催した。参加者は以下の十名である。

青木茂氏（町田市立国際版画美術館）・井澤英理子氏（山梨県教育委員会）・北畠健氏（茨城県立歴史館）・庄司淳一氏（宮城県美術館）・野地耕一郎氏（練馬区立美術館）・湯本豪一氏（川崎市市民ミュージアム）・菊屋吉生（山口大学）・田中淳・山梨絵美子・塩谷純（以上、東京文化財研究所）

この研究会では庄司氏が无声会について、菊屋が无声会から珊瑚会への流れについて発表を行い、その後、参加者の間で意見・情報交換を行った。その成果に基づいて珊瑚会関連の資料を集成したのが本稿であり、次号の『美術研究』で菊屋による同会についての論考を掲載する予定である。またこの資料収集で得られた珊瑚会展出品作のデータは、東京文化財研究所編『大正期美術展覧会出品目録』（平成一四年　中央公論美術出版）にインデックスの形で反映されている。

当研究調査にあたっては鹿島美術財団の研究助成を得た。また資料収集については、浅井麻起子・中村麗子・山崎啓子・山本裕史諸氏の協力を得た。記して御礼申し上げたい。

〔凡　例〕

・本資料集は珊瑚会に関する文字資料、および珊瑚会展覧会出品作の図版を集成したものである。文字資料については、珊瑚会の報道、展覧会評、関係者の回想を雑誌・新聞の記事から該当個所のみ再録した。また図版は基本的に雑誌・新聞に掲載されたものの複写だが、第四回展出品作である近藤浩一路の《墨堤花雨》については発表時の図版が確認されず、現在これを所蔵する山梨県立美術館の写真原版を使用した。

・構成は、珊瑚会が開催した展覧会（第一回～第一〇回）の資料を各回ごとに配列し、最後に珊瑚会関係者による同会についての回想の項を設けた。

・文字資料の再録にあたっては、旧漢字の使用等、可能な範囲で原典に忠実に行う

こととしたが、明らかに誤植と思われる語句はその箇所に「ママ」と付記し、またルビについては難読と思われるものを除きこれを省略した。なお判読不能の文字は■で表記した。

・典拠となった記事のタイトル（記名記事の場合はその名前も明記）と掲載された雑誌名・新聞名、およびその発行時は各資料の末尾に【　】で示した。

第一回展　会期：大正四年四月二一日～三〇日

会場：上野広小路・いとう松坂屋

▲珊瑚會　池田永治、小川芋錢、小川千甕、川端龍子、鶴田吾郎、名取春仙、山村耕花、平福百穂の同好八人にて珊瑚會を組織し來る四月十五日より二週間上野松坂屋に於いて第一回繪畫展覽會を開催すべし。

【「雜報」『美術新報』一四―六　大正四年四月】

▲珊瑚會　池田永治、小川芋錢、小川千甕、川端龍子、鶴田吾郎、名取春仙、山村耕花、平福百穂の同好八人にて珊瑚會を組織し、本日より二週間上野松坂屋に於て第一回繪畫展覽會を開催する筈

【「美術界彙報」『美術之日本』七―四　大正四年四月】

▲珊瑚會展覽會　は愈々二十一日より三十日まで松坂屋呉服店に開く

【「よみうり抄」『讀賣新聞』大正四年四月二一日】

▲珊瑚會　廿一日から上野のいとう呉服店に第一回展覽會を開く同人は芋錢、百穂、耕花、春仙、千甕、龍子等八人　【「美術界」『中外商業新報』大正四年四月二一日】

▲珊瑚會繪畫展覽會　池田永治、小川芋錢、小川千甕、川端龍子、名取春仙、山村耕花、平福百穂諸氏の間に成れる同會は廿一日より卅日迄上野廣小路松坂屋呉服店にて展覽會を催せり

【「消息」『都新聞』大正四年四月二二日】

川端龍子、池田永治、名取春仙、山村耕花、小川千甕、平福百穂、鶴田吾郎、小川芋錢、才筆家揃ひの第一回展覽會である。龍子の八點は繪馬風ともいふべき一種の新しい板繪で、生の交替を象徴した「古池」などが目につく、永治、春仙二氏は例の如く輕いスケッチを見せ、耕花の「助六」は氏として平凡なものであらう、百穂の「松八趣」は見るから胸がすく、百穂獨特の技巧を極度まで発揮した淡彩の小品で、もし八枚合せて畫帖にでも仕立てたらば松の國の誇をしみ〴〵感ずることが出來るであらう、千甕の十點は二點のベニス風景の紙本なるを除く外、皆尺五の絹本、此頃銀座で見せた風の胡粉派的な裝飾的な原始派的なもので、氏の自然觀照の領域の廣いことが想はれるが、衒氣に破綻の孕まれる弊がある「稲田」「春の國土」は面白く氣分を捕へて居る（卅日まで、上野松坂屋）

【「珊瑚會展覽會」『萬朝報』大正四年四月二四日】

●珊瑚會展覽會　百穂、千甕、耕花、春仙、永治、芋錢、龍子、吾郎の八畫家より成る珊瑚展覽會は四月二十一日より三十日迄上野松坂屋いとう呉服店で開催

【「文藝美術」『やまと新聞』大正四年四月二四日】

珊瑚會と云ふは龍子、永治、春仙、耕花、千甕、百穂、吾郎、芋錢の顔觸れにて其の第一回展覽會を二十一日より下谷上野いとう松坂に開催中なり、龍子の八作皆桐板の額面「老鼠」と云ひ「まじない」と云ひ「鳥猫」と云ひ「古池」と云ふなど一種の題材を取扱ひ、情趣を得たり春仙、半双の屏風に「たちばなとり」を描いて技巧を見せしも他の小品の或は「渡舟」と云ひ或、「烏賊」と云ひ或は「喧嘩」と云ひ或は「海■」と云ふか如き輕妙なるに如かず千甕は愈々眼と手と筆とを進めて獨特の境地に逢せるが如く部分的に破綻の見ゆるなからずして而かも個々の畫面を掩ふ一種脱俗的氣分は否む可らず百穂の「松八趣」に至ては場中の白眉淡々楚々として巧緻を極め八面八趣皆見る可し芋錢の作は未着にして耕花の「助六」は「雀の子」に及ばず（卅日迄）【「珊瑚會展覽會」『中外商業新報』大正四年四月二七日】

▲珊瑚會第一回展覽會　池田永治、小川芋錢、小川千甕、川端龍子、鶴田吾郎、名取春仙、山村耕花、平福百穂氏等の珊瑚會第一回展覽會を四月二十一日から三十日まで上野いとう松坂屋にて開催した。　【「雜録」『研精美術』九七　大正四年五月】

珊瑚會第一回展覽會

廿一日から廣小路のいとう松坂屋で開かれてゐる珊瑚會の第一回展覽會は、大體調子の似た作品で、小さいながら一寸面白い展覽會である。百穂氏の小品は最も洗練されて上品な内に輕妙な點がある。千甕氏の伊太利を描いた半切が面白く、他の傘さした人のゐるものがよかつた。春仙氏は六曲に得意の裝飾的のものと小品を描き、耕花氏は音羽屋の助六を描いてゐる。永治氏の小品は色んな人物が面白く描かれてゐる。吾郎氏の朝鮮風俗も小牛と小供のゐるのがよかつた。龍子氏は板の小品を描いて、濃い色彩を使つて相當に面白い。芋錢氏の作は未着であつた。（塔）

【「展覽會巡り」『美術週報』二一―三〇　大正四年五月二日】

二十一日―三十日　珊瑚會は上野廣小路松坂屋いとう呉服店に於て、第一回繪畫展覽会を開催したり。　【「藝苑月誌」『美術新報』一四―八　大正四年六月】

珊瑚會展覽會

珊瑚會と云ふは龍子、永治、春仙、耕花、千甕、百穂、吾郎、芋錢の顔觸れにて其の第一回展覽會を二十一日より下谷上野いとう松坂に開催した。

名取春仙の屏風物「たちばなとり」は、何んと云つても先づ會場全部を壓して見える努力の作と肯首かれた。詰り以前の「南國へ」と一つで調子の大きなものである。これを除いた凡ては扁額、半切等の輕い物が多く、川端龍子の八品中「森のおやぢ」が好い出來で其他も仲々面白いがべつとりした毒々しい色彩が斯うした奇智本位の作の輕快な感じを妨げてゐる、池田永治は半切に應しい、筆觸を持たしてゐる、山村耕花は「雀の子」と「助六」とを描いてゐるが、殊に作者の特色が窺はれる程の物ではない、「助六」は聊か野暮つたくなつてゐた。小川千甕には諸作の中「さみだれ」が一番作者の氣分とピッタリあつた物ではないが、劉生を思はせる様な辨尼（べに）斯（す）風景双幅も面白いには違ひないが評者は前者を採り度いいつ見てもその器用に感心させられるのは平福百穂の畫である。「松八趣」皆とりどりに結構、名取春仙の、動物を取材にした半切の中「喧嘩」は理窟無しに頂く、鶴田吾郎は變つた手法だが甘味に乏しい　【「美術界東西南北」『繪畫清談』三―六　大正四年六月】

▲珊瑚會第一回展覽会　いとう松坂屋

小川芋錢の『尾花の踊』『蛭の血』『釆蕁』など、眞に田園生活の眞趣を領會して、之を詩化し更に畫化したものである。超然獨樂の境に在る筆者が紙表に躍り出て居る。百穂の松八趣も亦獨得の畫致がある、千甕、龍子、春仙、耕花、永治、吾郎皆一癖あり。　【雪堂「晩春の諸展覽會」『美術新報』一四―八　大正四年六月】

第二回展　会期：大正五年四月一日～七日
会場：京橋・琅玕洞

▲珊瑚會　同人中に森田恒友氏を加へ來る四月一日より郊外と題する作品を揃へて琅玕洞に第二回展覽會を開く　【「風聞ろく」『国民新聞』大正五年三月二九日】

●珊瑚會第二回春季展覽會　四月一日より七日迄京橋南鞘町琅玕洞に於て開催今回の出品は「東京郊外」を主題とせるものなりと　【「美術會消息」『繪畫叢誌』三四三　大正五年四月】

▲珊瑚會第二回展覽會　牛歩、芋錢、千甕、春仙、耕花、百穂、恒友、龍子、吾郎等は東京郊外を主題とする作品を四月一日より七日迄京橋南鞘町琅玕洞に陳列する　【「文藝美術」『東京朝日新聞』大正五年四月一日】

▼珊瑚會第二回春季展覽會

「東京郊外」を主題とせる諸氏の作を陳列し四月一日より七日迄京橋南鞘町（東仲

通）琅玕洞に於て　【「事実と風聞」『やまと新聞』大正五年四月一日】

▲珊瑚會第二回展覽會　百穂を中心とする同會は百穂かぶれの人を作れり、吾郎は以前巧に柏亭を摸したるが今は百穂風にて、驚きたる事には芋錢また然り、而して吾郎に漫畫味あるに、其初蕙齋略畫式より入れる百穂の今は却つて之を忘れたる觀あるは一奇と謂ふべし、此會今度は「東京郊外」を課題とす、目黒派も嘗て斯る課題を置きたる事あるが、それは風景に即し、此は寧ろ人事を主とす、百穂の搾乳場、巡拜者、春仙のかし馬、靴屋、龍子の貰つた葱の始末、千甕の四ツ木、吾郎の犬、柄鍬等皆然り、但水藻の永治、品川の耕花等を例外とす、春仙のかし馬は地色に工夫のありせば適れの小品たりしならん、芋錢の作を春の卷とす、牛久の邊りなる農家年中行事繪卷也、昔日の俤無きは可悲、之は千甕の潮田と共に課題外也、恒友の無題二種に就ては暫く口を緘し置く　【「文藝消息」『萬朝報』大正五年四月四日】

珊瑚會第二回展覽會

「東京近郊」といふ課題の下に作られた同人の創作展覽會である。會場に入る前に飾窓を覗く、吾郎氏の「犬」と「錢湯」とが並んで懸つて居る。どちらも面白いが私は「錢湯」の飄逸をとる。場に入ると同じ人の「寒空」「柄鍬」「ヂャがいもの植つけ」の三つが並んで居る。飾窓のには劣る。龍子氏は四角な絹に「貰つた葱の始末」と「田に落ちて來た犬」の二つを畫て居る。恒友氏の作が二つ、共に無題。郵便配達夫が田舍道の傍に憩うて居るのがある。面白い處を捕まへたものだ。千甕氏のに「四ッ木」と「霜の朝」とがある。「四ッ木」はよく場所の氣持が表はれて居ると思つた。永治氏は「千住」「日暮里」「田端」「向島」を色紙に「葭」「水藻」を半切に畫いて居る。春仙氏は「草花店」「貸馬」耕花氏は「佃島」「品川」「日向」課題外「銀座」の四點を出して居る。百穂氏は「巡拜者」「搾乳場」に實に達者な筆を見せ芋錢氏の「春の卷」は場中第一に推すべきであらう。例の野趣の溢るばかりな筆で巧に嫌味無く飾氣無く、正月より種おろし迄の田舍を二丈の卷物に描いたもので、たまらなくいゝ。

【「展覽會巡り」『美術週報』三―二五　大正五年四月九日】

▲珊瑚會第二回展覽會　四月一日より七日迄牛歩、芋錢、千甕、春仙、耕花、百穂、恒友、龍子、吾郎等の東京郊外を主題とせる作品を京橋南鞘町琅玕洞に陳列せり。

【「美術界消息」『中央美術』二―五　大正五年五月】

珊瑚會展覽會

四月一日より七日迄京橋仲町の琅玕洞に第二回珊瑚會が開かれた松坂屋に見た第一回の時よりは出品數も少く畫面も小ぶりのものゝみであるが輕い手法で思ひの儘に描き現はした處に清洒な趣が味へる。

百穂氏の「搾乳場」、千甕氏の「霜の朝」、吾郎氏の「錢湯」「犬」、龍子氏の「田に落ちて來た狗」、耕花氏の「品川」などは面白いと思った、芋錢氏の「春の卷」は例の筆で田舍の春の行事を描いたものであるが俳味豐かなものであつた。

【「展覽會月評」『中央美術』二―五　大正五年五月】

第三回展　会期：大正六年五月一五日～二五日

会場：日本橋・白木屋

◎珊瑚會展覽會　百穂、恒友、耕花、春仙、龍子その他の諸氏より成る同會は十五日より二十五日迄白木屋に第三回を開く

【「文藝美術」『中央新聞』大正六年五月一四日】

▲珊瑚會　百穂春仙耕花龍子千甕恒友氏等を同人とする同會にては十五日より十一日間白木屋樓上に屏風展覽會を開く　【「文藝消息」『萬朝報』大正六年五月一四日】

▲珊瑚會第三回展覽會　は十五日より二十五日迄白木屋呉服店樓上にて開催す、今回は屏風を主としたる由　【「よみうり抄」『讀賣新聞』大正六年五月一五日】

第三回珊瑚會は廿九日迄白木屋樓上に開かる、芋錢の「焼茄」其中でも俳味横溢

し、千甕の「櫻」は興味一方の作、龍子の「獅子」屏風頗る努力の作にして調色も悪くないがモー一息鶴田の「東風吹く頃」はお得意のもの丈けに面白く「牛」も好かった。耕花の「五月雨」は大觀かと見分けが附かず春仙の「海の幸」は百穂の「歯朶」と共に場中會心の大作で恒友の四點例の通りであった。

【「第三回珊瑚會」『報知新聞』大正六年五月一八日】

白木屋呉服店三階に開いてゐる▲同人の作品二十五點其の中から眼についた物を一點宛拾つて見ると先づ龍子の「獅子」は全體の調子が至つて高く爲めに獅子の狂ひも單なる偶像ではなくなってゐる、春仙の「海の幸」は海女よりも鰹よりも椿の花が寧ろ命題の意を強く響かせてゐるのは面白い▲耕花の「五月雨」は氏の作品としては平凡たるを免れぬ、千甕の「初平初起」は列仙傳から題を得たものであらうが氏の浪漫的な手法は此の繪の上には多分に窺はれない、百穂の「歯朶」は配彩が巧である▲牛歩の作品には今度に限つて氏の特徴を見るに足る物がない様だ、強ひて擧ぐれは「ポプラ」の一點が、吾郎の「東風吹く頃」は紙上に湛へてゐる漣が宛らに船を浮かせてゐる、垣友（ママ）の「南郷八景」は人をして理解に苦まさせる繪だ然し仔細に眼を通せば畫中の山も木も水も人も共に極めて質朴に且つ甚しく悠長に生きてゐる、若しも此の繪が遠い過去の作家の筆であつたとしたならば世間は必ずや一の掘出物をしたと云つて騒ぐであらう▲最後に芋錢の「肉案」は粉飾と見榮とを忘れた氣分本位の繪である、「万象森羅隻手中」の賛と共に或る悟達の匂が嗅れる——二十五日迄（△△）

【「珊瑚會展覽會」『中外商業新報』大正六年五月一九日】

▲天分ある若い畫家連から成る珊瑚會の第三回展覽會を白木屋に觀た。大した力作も發見されなかつたが或は此の會には然う云ふ重い肩の凝るやうな作は望まれず却つて才氣走つた輕い作の方に其の特色を觀せて行くのかとも思はれる。

▲平福百穂氏の屏風「歯朶」は、詰らず却つて小川芋錢氏の禪味たつぷりの放膽なる筆致に面白味がある「肉案」「雲影」など夫である名取春仙氏の油畫風の「海の幸」小川千甕氏の油畫「初平初起」共に重苦しく「櫻」「山田の秋」は却て風趣がある。山村耕花氏の「五月雨」は耕花風の面白味あり、川端龍子氏の「獅子」面白さで場を壓し、他に池田牛歩氏、鶴田吾郎、森田恒友氏等の作がある。森田氏の作では細流と南郷三景の三とが面白い。【「珊瑚會の作品」『中央新聞』大正六年五月二一日】

◉第三回珊瑚會展覽會　春仙芋錢百穂千甕恒友等九氏の作品二十餘点で屏風が多い、略ぼ同じやうな傾向の人々だけに單調といへば單調だが、眞純な高雅な心持があつてい、

▲龍子氏の「獅子」は大膽な筆技と全幅に漲る心持が面白い、吾郎氏の「東風吹く頃」には單調な寂しい波の音が聞える、「牛」は整ひすぎてゐる、千甕氏の「初牛初起」の屏風は一寸見ると未醒かと思はれる程、小杉氏接近した傾向の作である

▲百穂氏の「歯朶」は清楚で金屏風のうつりもい、が、右方の褐色の岩が統一的調和を破りはせぬか、耕花氏の「五月雨」は大觀張であるが、雨に浸潤した樹葉は頗る氣持がい、

▲春仙氏の「海の幸」芋錢氏の「水郷二題」、恒友氏の「南郷三景」牛歩氏の「竹」「ぽぷら」等それ〴〵に面白い出來で、多くは俳味野趣眞の意味に於ける一脈の漫畫味を看ることが出來る（白木屋呉服店に於て廿九日まで）

【「文藝消息」『萬朝報』大正六年五月二二日】

■珊瑚會第三回展覽會　は五月十五日より二十五日迄白木屋呉服店樓上にて開催す。

【「諸會報」『美術新報』一——八　大正六年六月】

△珊瑚會第三回展覽會　（十五日——廿四日）白木屋呉服店

【「展覽會」『美術』一——八　大正六年六月】

▲珊瑚會第三回展覽會　五月十五日より二十五日迄白木屋呉服店樓上に於て開催。

【「美術界消息」『中央美術』三——六　大正六年六月】

第三回珊瑚會展覽會（於白木屋呉服店）

小川芋錢氏の淡彩を主とせる洒脱な所謂俳味を帶べる描寫は吾人に一種の快感を附

與すと雖も、畫に對する氏の深刻ならざる考から吾人に與ふる印象は淡い。小川千甕氏「初平初起」二曲屏風半双は場中の大作と云ふべく其の構圖色彩にいたつては正に小杉未醒氏に髣髴たるものがある。之を裝飾的の作品として見んか未だ到らざるの點あるを悲しむ。色彩の並列に於ても今少し研究を要す。「船橋」なる一幅は芋錢氏の作品に比して眞面目なるを覺ゆ、川端龍子氏の「獅子」は例によつて強烈なる色彩と總てが省察を以て爲しとげられて居る。獅子の割合に牡丹が寫實に傾いたのは殘念である。鶴田吾郎氏の「牛」二曲半双、何れの方面に於ても今少し研究を要す。裝飾的なれば裝飾的、寫實的ならば寫實風に。名取春仙氏の「海の幸」は二曲半双としては些か重過る。或壁畫の一部分を割いたかの感がある。構圖は甚だ興味をそゝるものだ。山村耕花氏の「五月雨」は色彩人をチヤームすると雖も全幅の統一を缺く。森田恒友氏の「南郷三景」は近代の南畫的氣分を與ふ。然し描寫は未だ必ずしも妙と云ふことは出來ない。

【「五月の美術界」『美術新報』一六―八　大正六年六月】

▲第三回珊瑚會展覽會　白木屋階上

近來趣味を同ふする人々の小團體の起る傾向がある、これも其一つで、形似以外主觀的表現を主とする作家の群れである。既に第三回で旗幟は益鮮明である。芋錢氏の「肉案」には洒脱なる禪味があり、「雲影」の仙骨ある老子と奇古なる牛とは共に超俗的氣分に富む、「水郷二題」は「冬」を愛する。鶴田吾郎氏の「東風吹く頃」は海風畫面を吹いて暢びやかな海苔採る女の生活を想はしめる。「牛」には一種の強い印象がある。川端龍子氏の「獅子」は奇抜なる意氣があり、小川千甕氏の「初平初起」は畫面稍重く、「船橋」の輕き氣分を愛す山村耕花氏の「五月雨」柔かな色調に情趣を漂はし平福百穗氏の齒朶は美くし森田恒友氏の「南郷三景」は（一）（二）面白く、池田永治氏のは「竹」「ポプラ」好し。

【雪堂「晩春の諸展覽會」『美術』一―八　大正六年六月】

珊瑚會展覽會

第三回の繪畫展覽會を白木屋に開いた、陳列點數二十餘、小點から二曲屏風に至る面積の大小に格段の重みある如く技法も思想も甚だしい差別を見せて居る。池田牛歩の三點では半切の『ポプラ』を執るべく千甕の四點中『初平初起』最も力作であるが往年の院展に於ける未醒の『黄初平』を取入れた色がないでもない、龍子の『獅子』手法に於て豪快の趣は得たもの、藥師寺三尊臺座の鬼面に似た獅子の面貌が漫畫臭を脱し得ない、芋錢は『水郷二題』外四點の紙本を出して居るが何れも輕快洒脱而して詩味禪味ゆたかなるものである。吾郎の二曲半双『牛』と春仙の『海の幸』とは裝飾的効果を得べく望んだらしく而して寫實に禍ひされて居る。耕花の『五月雨』は一通りと評すべく、百穗の紙本金地に岩繪具を盛上げた二曲屏風の『齒朶』は宗達風の氣分に寫實味を加へた佳作であつた。恒友の奉書に試みた景色數點は新南畫の完成を志して行く其道程にあるものと見る。―五月十五日より廿九日迄―（掬）

【「展覽會月評」『中央美術』三―六　大正六年六月】

第四回展　会期：大正七年五月二四日～三〇日
会場：上野・松坂屋

◎珊瑚會展覽會　百穗、耕花、春仙、芋錢、龍子、永治、千甕、恒友氏等の同人より成る同會は二十四日より三十日迄上野廣小路松坂屋呉服店にて開く

【「文藝美術」『中央新聞』大正七年五月一九日】

▲第四回珊瑚會展覽會　は二十三日より卅日迄松坂屋呉服店樓上に開催、今回は横卷を主として試みたる由

【「よみうり抄」『讀賣新聞』大正七年五月二二日】

◎珊瑚會の繪卷　廿三日より松坂屋にて開く同會には同人の横卷を主として出品

【「文藝美術」『中央新聞』大正七年五月二二日】

▲珊瑚會展覽會　小川芋錢、山村耕花、森田恒友其他の諸氏より成る珊瑚會は廿三

日より三十日迄上野廣小路松坂屋は第四回展覽會を催す

【「消息」『都新聞』大正七年五月二二日】

▲第四回の珊瑚會は繪卷物の展覽會である、繪卷物以外の作品にも、多くは繪卷物の傾向を帶びた一種の連作が多い

▲全体から云つて、作物や傾向の類似から單調と云へば單調でないでもないが、芋錢、龍子、浩一路、千甕、牛歩、百穂、恒友、春仙等のどこかに共通した純朴な素質のある人の集だけに、氣持よく見られる

▲龍子の「大森八景」はまだ三品出てゐなかつたが、八景を新しく取扱つて相應に纏のある佳作である、恒友の「水郷初夏」の畫卷は少しく單調だが「沼邊の晩春」その他の作品になると、自然の心持を克く捉へた南畫等と共通した點がある

▲浩一路の筆は聊か繁縟に過ぎて畫面の騒しい難はあるが、此の人はどこかに傑れた者を持つてゐる、千甕の「落日」は縁起物を想はしめる、同氏の「八瀬大原」、芋錢の「海天半晴」等にも捨て難い風格がある

▲芋錢の「百魔畫卷」耕花の「異國の禽獸」はもつと各体の間に關聯した趣味を見出して貰ひたいと思ふ、牛歩の畫卷は草稿である、却つて潮來その他の出品に氣の利いた輕い品の者がある（廿九日迄、上野廣小路松坂屋）

【「珊瑚會第四回展覽會」『萬朝報』大正七年五月二六日】

▲珊瑚會　山村耕花氏「異國の禽獸」近藤浩一路氏「墨堤花雨」池田牛歩氏「水郷餘情」小川千甕氏「八瀬大原」等繪卷物を中心として居るが森田恒友氏の「水村初夏」は特に面白く小川芋錢氏の「百魔畫卷」は珍、其他では名取春仙氏が「山と海」に於て神話的氣分を出さうとした試みが面白く、恒友氏「淀河畔」等は洋畫を基とした新南畫の創意に無限の味あり、川端龍子氏の「大森八景」はセザンヌを想ひ起させるもの、「羽田歸帆」「大井落雁」「鮫洲夕照」は推賞に値す（三十日まで松坂屋にて）

【「最近の展覽會」『東京朝日新聞』大正七年五月二七日】

第四回展覽會　は目下上野廣小路いとう松坂の四階アヤハ倶楽部に開かれてゐる極く輕い物許りであつさりと快よい感じを與える◇牛歩、千甕、芋錢、龍子、春仙、耕花、恒友、浩一路、翰と云ふ腕達者諸氏の顔觸なれば面白からぬ譚無く、芋錢氏の「百魔畫卷」（繪卷）就中人氣を吸集し居れり、古い所の動物戯畫其の他様々の材料を巧に取入、自家藥籠中の物として才氣喚發、奇想天外、洵に作者が鬼才の程窺ふに堪へたり◇浩一路氏の三繪卷中「墨堤花雨」我等に親しみあり、色彩稍冗過ぎるの概あれど決して凡手とせず◇龍子氏の「大森八景」、春仙氏の「鵜茅の産屋」、恒友氏の「水村初夏」等大分繪卷物の氣勢を揚げ居り、耕花氏の「異國の禽獸」の繪卷亦珍らし◇恒友氏の日本畫は實に巧妙日本畫家の■企し能はざる畫面を捉へて居る、翰氏の「喜色」其他も特色的で氏の有望さを物語つてゐる。未だ百穂氏の作品に接し得ざりしは遺憾、會期を二十九日迄とする。

【「珊瑚會」『時事新報』大正七年五月二八日】

珊瑚會第四回展覽會は上野廣小路松坂屋樓上に三十日迄開かれてゐる。平福百穂氏の「神語」は、金鈴社出品の諸作の如く、輕妙纖細なる筆にて記録中より取材し鳥獸を通じて悟る神語を三幅に畫き分けたる情趣本位の作、芋錢氏の「百魔繪卷」と共に最も場中にて光つてゐる。川端龍子氏の「大森八景」は沈滞せる色に反感を伴ふが「羽田歸帆」等には流石に面白き節あり、小川芋錢氏の「百魔繪卷」は百穂以上の魑魅魍魎を畫き分けたる怪異なる一卷で、氏の腕の冴えを知るに足るもの、其他繪卷「水草」も觀る可きもの、名取春仙氏の「山と海」は自由なる構想に此の作家の本領を見る可く、森田恒友氏の繪卷「水村初夏」にも流石に洋畫家ならではと首肯さるゝ面白い觀方がある。近藤浩一路氏の三卷中では「墨堤の花」を尤とす、氏近來の出來其他千甕氏の「八瀬大原」牛歩氏の「潮來出島」耕花氏の牡丹及び「異國の禽獸」等がある。

【「珊瑚會展覽會」『中央新聞』大正七年五月二八日】

珊瑚會展覽會を松坂屋呉服店樓上に見る繪卷を多く蒐め第三回に比して會員の努力欣ぶ可く川端龍子氏の「大森八景」は場中の異彩を放ち山村耕花氏の「異國の禽獸」は頗る輕快な即興的作物であつた、森田恒友氏の淋しい風景は「田圃初夏」を

佳作と見た、小川芋錢氏の「百魔畫卷」亦珍とすべく得意の河童は愉快なもの、近藤浩一路氏例の通り發揮して平福百穂氏の「神語」は遉に品位の高いものであつた（三十日迄）　【「珊瑚會展覽會」『報知新聞』大正七年五月二九日】

百穂、芋錢、耕花、龍子、恒友、春仙、牛歩、浩一路氏等の第四回珊瑚會は自廿四日至卅日上野廣小路松坂屋アヤハ倶樂部に開催して居る◇場中での大作は芋錢氏の「百魔畫卷」で形や運筆の上に■應の苦心は見られたが深酷をかき平板に見えるのが疵である百穂氏の「神語」三點では氏の藝術が愈々現代離れ人間離れがしつゝある事を示してゐる◇龍子氏の「大森八景」は面白かつた殊に「羽田歸帆」と「大井落雁」「鮫洲夕映」が優れて居る耕花氏の「牡丹」「異國の禽獸」では後者が佳作である◇牛歩氏の「水郷餘情」二卷に實に達者なもの恒友氏の風景にも佳作が二三点あつた（四■）　【「珊瑚會」『中外商業新報』大正七年五月二九日】

▲第四回珊瑚會展覽會　五月二十四日より三十日迄上野松坂屋呉服店に於て開催。　【「美術界消息」『中央美術』四―六　大正七年六月】

▲珊瑚會第四回展覽會―松坂屋―

今回は繪卷横物等を主としたので、點数は少いがそれだけ面白く見られた。龍子氏の大森八景の中では「羽田の歸帆」「池上の晩鐘」を擧ぐべく、芋錢氏の「百魔繪卷」は異彩を放つて居た。百穂氏の「神語」は例の上品な筆つきも床しく、沼河日賣が最も佳かつた。恒友氏の「沼邊の晩春」見てゐる程よく、耕花氏の「牡丹」「異國の禽獸」牛歩氏の「水郷餘情」等何れも捨て難い作であつた。（愚哉）

【「展覽會巡り」『美術旬報』一六〇　大正七年六月九日】

□珊瑚會第四回展覽會（於上野松坂屋）

平福百穂氏の作品は力作ならずとするも氏の特異なる氣持を失はず、近藤浩一路氏の卷物「雨の隅田川」は花見時の情緒巧に現はれたり佳作と云ふを憚らず「山國の温泉町」も又面白しと雖も、腕の達者に任して逃げたる跡あり。遺憾となす、矢立仕事を主とせず着實の研究を望む。小川芋錢氏の「卷物妖怪圖」極めて面白く横卷とし成効せるものと云ふべし。想像も及ばぬ怪物の勝手に跳梁せる様鬼氣人を襲ふものあり佳品と云ふべし。小川千甕氏の「釋迦」は所謂半切風の表現としてならば不可なきも氏の如き眞摯なる態度を持せる人の作品としては大に物足らぬ心地のするも止むを得ざるべし。兎に角會員諸氏の作品に獨特の面白味あり他の諸會合に比して遙かに多きは吾人本會の爲に嬉ぶべしとなす。（K）

【「初夏の美術」『美術新報』一七―八　大正七年六月】

○珊瑚會展覽會

珊瑚會第四回展覽會は上野廣小路松坂屋樓上に開かる。平福百穂氏の『神語』は金鈴社出品の諸作の如く、輕妙纖細なる筆にて記録中より取材し鳥獸を通じて悟る神語を三幅に畫き分けたる情趣本位の作、芋錢氏の『百魔繪卷』と共に最も場中にて光つてゐる。川端龍子氏の『大森八景』は沈滯せる色に反感を伴ふが『羽田歸帆』等には流石に面白き節あり、小川芋錢氏の『百魔繪卷』は百穂以上の魑魅罔兩を畫き分けたる怪異なる一卷で、氏の腕の冴えを知るに足るもの其他繪卷『水草』も觀る可きもの、名取春仙氏の『山と海』は自由なる構想に此の作家の本領を見る可く、森田恒友氏の繪卷『水村初夏』にも流石に洋畫家ならではと首肯さるゝ面白い觀方がある。近藤浩一路氏の三卷中では『墨堤の花』を尤とす、氏近來の出來其他千甕氏の『八瀬大原』牛歩氏の『潮來出島』耕花氏の牡丹及び『異國の禽獸』等がある。

【「五月の展覽會」『審美』七―六　大正七年六月】

※「珊瑚會展覽會」（『中央新聞』大正七年五月二八日）の再録

●第四回珊瑚會展覽會　同二十四日より三十日まで、松坂屋呉服店に開き、主として春仙百穂龍子諸氏の横卷が陳列された。

【「時報」『美術畫報』四一―九　大正七年七月】

珊瑚會展覽會

趣味と研究の等分持寄りで成立つたやうな此會も第四回の展觀を見せるまでに生

長した。會員の多くは一家の格を持ちながら何處にか一脈の共通味を有するやうに見えてゐる。今回は卷物を主としそれに約三分の一の小品をあしらひ先づ陳列の形式に於て變化を見せやうと企てたが横卷の長尺物を多く列べた事は此豫想に反對の結果を生んだ、日本畫の展觀に縦面的の作品を見慣れてゐる吾人はそれ等多數の長卷に接して視力の疲勞を感ぜずにゐられぬからである。開會第一日は未だ出揃はなかつたが一覽の所感を記せば名々獨特の境地に立つて思ふさま筆を揮はうとする意氣込の見える事が嬉しい中で最も表現の強烈なものに川端龍子の「大森八景」がある、第一日は三景未出品であつた中に「大井落雁」が傑れてゐた。とある工場際の濕地の埋立に赤土を運ぶトロ車押の人夫を點出し工場の多い町の空に三四の雁を描出した　煤煙と塵埃の多い郊外の一部を捉つて畫材となし其處に一道の深刻味を現はした處が形式を脱してゐて面白い、「鈴森晴嵐」は初夏の爽やかな空の下にセザンヌ風の人家を列ねて畫題に相應はしい感じを出してゐた。小川千甕の「落日」は海に落ちる日輪と丹朱の樓閣と落日を拜する人物などを古畫卷風に描いたもので覗ひ處は鎌倉時代の縁起ものにあるらしい。小川芋錢の「百魔畫卷」は種々雜多の魔物を描き集めたもので筆者獨特の筆致を示してゐるがそれ等全世界の化けものどもが芋錢の勸請に依つて集合したらしく、印度、ギリシヤ、アツシリヤ、支那、朝鮮までも含まれて吾人がお馴染の化けものもなきにあらずである。筆者の畫室は牛久沼の滸にある處から沼の精の示現なども筆に上されたかも測られない。然し藝術味に於ては小品「盧陵米價」の超越せるに及ばない。近藤浩一路は長卷三點を出した。中で「雪の妙高」が傑出してゐる。筆者は漫畫の達人として名を馳せてゐるが之れ等の畫卷は從來の境より一歩高處に上りはじめたもので徹底的觀照が見え始めて來たやうに思はれる。概念と感興とを卒直に現はさうとするやり方は詩情を第一義とした南宗畫人等と似通へども此人は物象の表現を寫生の根基に据ゑてゐるから危氣がなくてよい。森田恒友には小品「雪の山村」最も傑れ、畫卷「田甫初夏」之れにつぐ、最も簡約した筆致の中に觀照の確實を見せる處はえらい。名取春仙の「鵜茅の産屋」は古事記よりの取材で院展に出した「滿珠于珠」と同一題材である。山村耕花の「異國の禽獸」は平素に比して振はなかつた—自五月廿三日至廿九日、いとう呉服店—（掬）

【「展覽會月評」『中央美術』四—七　大正七年七月】

珊瑚會第四回展覽會

山村耕花氏「異國の禽獸」近藤浩一路氏「墨堤花雨」牛田牛歩氏（ママ）「水郷餘情」小川千甕氏「八瀬大原」等の繪卷物を中心として、五月二十六日から五日間松坂屋で開かれた。面白いと思つたのは繪卷物では森田恒友氏の「水村初夏」であつた。沼澤に住む魚類を卷末に巧みに描いて、全體の繪卷を活してゐる。又小川芋錢氏の「百魔畫卷」は數年前の構想で、今ならもつと好いものが出來るだらうとの事であつたが、出て來るお化は種々様々で、日本のもあり、外國のもあり、更紗模様から取つたのもあつて、奇々妙々な作であつた。普通の畫では名取春仙氏の「山と海」とが神話的氣分を出して、氏の特技を示し、森田恒友氏は琅玕洞に出したやうな墨畫で「雪の山村」「沼邊の晩春」「淀河畔」等の傑作を見せた。又川端龍子氏はセザンヌのやうな筆法と着色とで「大森八景」を描いたが實に好い作だと思つた。中でも「六郷暮雪」「羽田歸帆」「鮫洲夕照」「大井落雁」等は、從來の日本畫ではとても見られない味である。美術院の若い人たちがドン〳〵新らしい方面に成功して行くのを見ると、實に痛快である。【「陽炎鑑賞記」『美術畫報』四一—九　大正七年七月】

▼珊瑚會　小川芋錢氏＝の繪は生命に觸れた安住の繪である『盧陵米作麽生價』と書いた文字が超凡的態度を示して居る、水草花卷、百鬼夜行は誰れに見しよとて書いたものでも無い氏の遊戯三昧になつたものである。▼川端龍子＝八景は子一流の描寫に圓熟した、其中で大井落雁、鮫洲夕照が面白い六郷暮雪、羽田歸帆、麗に刷し過ぎた爲、力が減じた、大體に於て感じも良く出て居る此上子に望む處はモット強い大生命の表現に勉むる事、それである▼山村耕花氏＝異國の禽獸は形に於て個々の特長か描かれ居る、但し個々の本性に對して今少し注意を拂つて貰ひたかつた▼池田牛歩氏＝小品の中、上げ汐は佳作であつた、輕い漫畫よりも氣分に於て一歩抽出して居る、水郷餘情などの荒出した描寫にも捨て難い趣がある▼石塚翰氏＝の花屋敷はイサクサした空氣が出て居る、喜色の方は此方には受け取られない寧ろドス黒い悽慘の感じがする▼小川千甕氏＝落日は中央の女に對し周圍の伽藍や漁師町が同一の歩調を取つて呉れない、片隅にある落日の位置が構國（ママ）上から面白く、女も良く描けて居る丈け、其他の景物が玩具のように見える、四井のものがマザマザ

と描いて貰ひたかつた八瀬大原のスケツチ場所は捉えられたがマツト地方色を強く出したらと思ふ▼近藤浩一氏（ママ）＝澁入泉圖は其寫生に山國の建築など或部分面白く描かれたと思ふ▼平福百穐氏（ママ）＝神語は細かな器用な筆寧ろ反感の起る程嫌ふ……若し氏の得意であろふとも、上に書いた文字が落ちついて居る其の方がよろしい▼森田恒友氏＝細かな線だ百穂氏のような氣はしない、情趣がある、まつと省いて其代りに急所を強く出して貰ひたい、チト五月蠅く見える、ケレども氣持ちの悪い五月蠅さとは違ふ水村初夏が良かつた。

【靈山生「展覽會巡禮」『現代之美術』一―二　大正七年七月】

挿図１　小川芋銭《百魔絵巻》　『中央美術』6-9より

挿図２　小川芋銭《水草絵巻》　茨城県近代美術館蔵

挿図3　近藤浩一路《墨堤花雨》　山梨県立美術館蔵

第五回展　会期：大正八年四月一一日～一五日
会場：日本橋・高島屋

▲珊瑚會第五回展覽會　四月十一日より十五日まで高島屋呉服店に開催、今回は會員悉く東京を畫く事を申合せしたりと。

【「美術界消息」『中央美術』五―四　大正八年四月】

▲會の消息　「第五回珊瑚會展覽會」は十一日より十五日迄高島屋に開催と決定今回は各自東京を畫題とせる試作を發表する筈なりと

【「よみうり抄」『讀賣新聞』大正八年四月九日】

▲珊瑚會　十一日より十五日迄高島屋呉服店に第五回展覽會を開く今回は會員各自東京畫題とせる試作を発表すと【「文藝美術」『東京朝日新聞』大正八年四月一〇日】

▲珊瑚會展覽會　十一日より十五日迄高島屋呉服店にて開會す

【「消息」『都新聞』大正八年四月一〇日】

▲珊瑚會展覽會　十一日より五日間中橋高島屋にて開催、既報の如く會員は各自東京を畫題とせる試作を発表すべし　【「風聞ろく」『国民新聞』大正八年四月一〇日】

◆珊瑚會繪畫展覽會　同會第五回展覽會は十一日より十五日まで高島屋呉服店で開く畫題は特に東京の地を擇んだものばかりであると

【「文藝美術」『中央新聞』大正八年四月一一日】

●珊瑚會　十一日より十五日迄京橋南傳馬町高島屋呉服店樓上に於て第五回珊瑚會展覽會を開く同會は芋錢、千甕、龍子、春仙、耕花、百穂、恒友其他の畫家の會合なり

【『やまと新聞』大正八年四月一一日（夕刊）】

▲珊瑚會の第五回展觀が十一日から十五日迄高島屋に開かれ、た芋錢子の「抱甕痴」は頗る眞面目な筆で輕い滑稽味を加へ千甕氏の「海村夕照」は氏近來の佳作であつた、耕花氏の「髪」は豐麗な色彩龍子氏の「鶯花曉色」の強烈な色調と相對し浩一路、恒友兩氏共に光つてゐた。尚會員一同の「東京」試作は這回の呼物であつた

【「展覽會覗き」『報知新聞』大正八年四月一二日】

珊瑚會第五回展覽會

▲芋錢、龍子、浩一路、耕花、千甕、春仙、恒友、永治、翰諸氏の日本畫展覽會たる珊瑚會が高島屋の三階に近作三十點あまりを展觀してゐる、その中の半は東京を畫題とする作品である、浩一路君の「東台春光」は樹間に花を看る人の雜沓を描いたもの、恒友君の市外雜景三點は何れも氣の利いた小品である、芋錢氏が芝浦の潮干狩を描いてゐるのも興が深い、千甕君の隅田川は繪馬の彩色を思はせる

▲龍子君の「光風」は日比谷公園の鶴の噴水を描いたもので色の柔い感じが如何にもい、心持を與へる、同君の屏風「鶯花曉色」は金地に二三の草屋三四本の梅樹を描いて素朴な中に豪健な面もうら寒い感じを湛へた非常な佳作である

▲石塚翰君の中では「瓦燒く」がい、上下に明暗の對照を附して、水邊の瓦燒場の狀景を心持よく表してゐる、千甕氏の「海村夕照」は自由な洋畫風で新味を示してゐる

▲春仙君の「緑の中の光」は松の木の間に大佛の頭部を出した大作で一種の莊嚴な氣持をよく捉へてゐるが、松が前後同じ樣に描かれてゐるのは考へものだ、浩一路君のでは「姥子早春」が最もい、、君の輕燥な筆が次第に沈厚になつて、何ともいへぬい、味を見せてゐる（十五日まで飯田呉服店）

【「文藝消息」『萬朝報』大正八年四月一二日】

■新作精華珊瑚會號　今回精華社から出版された石塚翰氏の「晩鐘」池田永治氏「春惜繪卷」小川芋錢氏の「抱甕痴」小川千甕氏の「海村夕照」川端龍子氏の「風光」名取春仙氏の「緑の裡の光」山村耕花氏の「髪」近藤浩一路氏の「東台春光」森田恒友氏の「釣橋」をコロタイプに附して挿入した

【「文藝美術」『中央新聞』大正八年四月一九日】

■珊瑚會第五回展覽會　芋錢、恒友、龍子、耕花、浩一路、百穂、千甕其他數氏の珊瑚會展覽會は日本畫の展覽會として例年最も見映えのする一つである、本年は四月十一日から十五日迄高島屋で開催した、作品は三十點に過ぎないが兎に角日本畫としては内容と生氣を有つてゐる、森田恒友氏の市外雜景十二社、淀橋、代々木の三點は誇らず衒はない自らの風格が畫面に備つて見るからに快い、此外約半數は「東京」を題材にしたものであつて、芋錢氏の芝浦、龍子氏の日比谷公園、浩一路氏の東臺春光など興味深く、千甕氏の小品も野趣があつて面白い、石塚翰氏の二曲半双「瓦燒く」は外光に對する氏の敏感を窺ふに足るべく夫れが遠近ともなり明暗ともなつて半ば畫面の効果を助けてゐる、此の意味で日本畫家としては珍らしい作家である、芋錢氏の抱甕痴は氏本來の作、新味はないが佳作である、龍子氏の梅花曉色二曲一双は氏としては餘りに概念的である、むしろ前者をとる、名取春仙氏の金佛を描いた大幅は愚作である、浩一路氏の春曉燈下、砂上力人などは氏の本領を發揮して遺憾なき作品である。恒友氏には前記の外釣橋若葉の二點がある何れも紙本水墨の新らしく心を惹くものである。百穂氏の作品は未着で見ることが能きなかつた。

【「展覽會巡り」『美術旬報』一八九　大正八年四月二九日】

●第五回珊瑚會展覽會　同十一日より十五日まで、京橋南傳馬町たかしまや呉服店にて開會。龍子、春仙、芋錢、恒友、耕花等の作品を陳列。

【「時報」『美術畫報』四二―七　大正八年五月】

第五回珊瑚會

會場は割合に狹く、三越や白木屋のやうに、晴々せない、高島屋の三階では、鑑賞の心持も幾分か異なる樣に思はれる。併しどちらかといへば陰氣なだけに落ちついた氣分も出て、數の少ない小品を見る場合には、寧ろ適してゐる。

名取春仙氏の「緑の裡の光り」は、緑青に金泥を配して林の稍繁つた樣を描いたもので、その樹の間に、見ゆる大佛の容貌に、慈悲圓滿の相が拜まれて、筆致にも重々しい品位が具つてゐた。森田恒友氏の「市外雜景」の内では、「代々木」と

「淨水道」とが佳く、池田永治氏の紙本水墨の小品、「千住の雨」、「品海」、「凌雲臺」は何れも雅趣に富んだもので、中にも「千住の雨」は最も優作。小川芋錢氏の作では、芙蓉洲池（芝浦）に特に目を惹かれた。近藤浩一路氏の諸作は、その中の「東臺春光」のやうに、横卷に描かれるべき性質の構圖を、長い竪幅に施したものには、稍々新し味のある中に多少の無理な點も見えるが、「姥子早春」や「初夏浴泉」などと共に概觀すると、輕快な筆の運びに一種の面白味が見られる。併し、此の筆者には限らず、一般に此の種類の繪は、ちょつと見た目に面白くとも、長い歳月には、見飽きるといふ弊を免れない。

私は國畫創作協會を思ひ起して、此の會の出品を見て廻つた。

【しづき「水草記」『美術畫報』四二―七　大正八年五月】

珊瑚會（第五回）

掬汀生

多數者の作品を目まぐるしく陳列された展覽會場に入る時我等は鑑賞の快を味ふよりも苦痛を感ずる場合が多い。作家の心境に逍遙して藝術の快さに耽るには少數作家の少數陳列に如くはない、此意味に於て吾等は毎年珊瑚會展覽會を樂んで期待するものである。こんどは第五回目で列品數三十六點、作家は十一名と云ふ小世帶ながら例に依つて特色を發揮すること容積と員數のみの尨大な展覽會をして後へに瞠若たらしめる、作家名いろは順を以て陳列した作品中吾等の感じ得たるところを記して見ると、いの一番の池田牛歩に「惜春畫卷」と題する長尺ものと日光山の景趣を寫した紙本小點が二つあつた、卷物は墨線を以てした連續的スケッチと云ふに過ぎないもので、日光山の二題は感興を盛る事を目的とした奉書の水墨畫であるが概念の散漫な爲か技巧に不熟な爲か筆致あらく局面粗笨でホンの稽古畫に過ぎない。石塚翰の三點では二曲半双の「瓦燒き」が生まなか巧者を衒はず忠實に描いたその態度がいゝ。小川芋錢の「抱甕痴」は枯淡にして雅潤、超越したる味を有してゐ。る（ママ）小川千甕の「海村夕照」は房州あたりの漁村に於ける夕べの慌しい光景を寫したものでゴガンの作品を髣髴せしむる、が重い箔地に施した褐色は夕陽の反射を表現すべくして却て其反對に混濁の感を起させるやうに思ふ。

川端龍子の「鶯花曉色」は金地の二曲屏風に三軒の茅屋を描き咲誇れる白梅數株軒を繞つて立ち、曉靄一抹又一抹、軒端を掠め梅幹を埋むるその圖は先づ構圖に於て成功してゐる。色彩感の鮮やかな表現は言はずもがなだが總じて豪快なその畫面の背後に筆者のデリカツトな感情が流れてゐる、裝飾的効果と云ふ方面から見れば此屏風は筆者が從來公けにしたものゝうちで最も優れたるものと云ふことを否まれない、のみならず近時展覽會出品中の傑出した一作である。他の一點、日比谷公園噴水の一部を截切つて描いた「光風」は金泥の色階に裝飾的効果を收めんとしたもので是亦目的を達してゐる。名取春仙の「緑の裡の光り」は松林の中に聳え立つ廬遮那佛を畫いたもの、むらがり立つ黒松に圍まるゝ御佛の莊重なおん姿高く拜まるゝと記すを以て筆者の豫期した効果を收め得た事を知られる山村耕花の「髪」は大幅面であるが筆者の作らしいと云ふだけのものであつた。近藤浩一路の數點では南宗味を盛らんとした奉書半切の「密林圖」と端的に自然を寫した「姥子早春」が優れてゐる。森田恒友の「青葉」と題した紙本水墨は洗練したる筆致と鋭敏な感覺の表現と相俟つて獨自の趣致を保つてゐる。他に市外の景趣を寫した三點では「代々木の原」が最も佳い、之等小品は東京を題にした所謂課題品であるさうだが同じ出品で浩一路の「東臺春光」は櫻雲萬朶の上野の山にのどけき日の光を漲らす情景を描寫した努力作で注目すべきものであつた。千甕のでは「隅田川」がよく石塚の「不忍の夕立」も變つた面白味を持つてゐた。―自四月十一日至十五日於高島屋呉服店―

【「展覽會月評」『中央美術』五―五　大正八年年五月】

◎珊瑚會の評

▲東京を畫材とした面白い試作に一趣の興味を覺える珊瑚會の第五回展覽會は十一日から十五日迄中橋のたかしまやを會場として開會した。

▲森田恒友の「市外雜景」は（代々木）にしろ（十二社）にしろ何よりも其の土地の氣分が能く現はれて居るのが嬉しく、近藤浩一路の「東臺春光」は横卷に適する様な花下群集の状を竪長に描いたもので他の一點「白砂青松」と共に暢氣らしい構圖に妙があつて煩瑣の嫌ひを償つて居る、小川千甕の「甃道」は簡潔な圖様で其銀座街頭の一部たるを肯かしむるのを面白しとし小川芋錢が芝浦の汐干狩を描いたの

も實景を看るよう、又川端龍子の「光風」は鶴の噴水と金泥の藤棚だけで巧に日比谷公園を畫にした才能に感心するけれど本領は「鶯花曉春」の方に現はれて早曉の意を一抹の藍青に托したのも獨創の境地である、而して池田永治のは「櫻雲臺」が好く石塚翰のは「牛」の居る春景が快かつた。

【「四月の展覽會」『審美』八―五　大正八年五月】

珊瑚會第五回展覽會

▲芋錢、龍子、浩一路、耕花、千甕、春仙、恆友、永治、翰諸氏の日本畫展覽會たる珊瑚會が高島屋の三階に近作三十點あまりを展觀してゐる、その中の半は東京を畫題とする作品である浩一路君の「東臺春光」は樹間に花を看る人の雜沓を描いたもの、恆友君の市外雜景三點は何れも氣の利いた小品である、芋錢氏が芝浦、潮干狩を描いてゐるのも興が深い、千甕君の隅田川は繪馬の彩色を思はせる。

▲龍子君の「光風」は日比谷公園の鶴の噴水を描いたもので色の柔い感じが如何にもい、心持を與へる、同君の屏風「鶯花曉色」は金地に二三の草屋三四本の梅樹を描いて素朴な中に豪健な而もうら寒い感じを湛へた非常な佳作である。

▲石塚翰君の中では「瓦燒く」がい、上下に明暗對照を附して、水邊の互燒場の狀景を心持よく表してゐる、千甕氏の「海村夕照」は自由な洋畫風で新味を示してゐる。

▲春仙君の「緑の中の光」は松の木の間に大佛の頭部を出した大作で一種の壯嚴な氣をよく捉へてゐるが、松が前後同じ樣に描かれてゐるのは考へものだ、浩一路君のでは「姥子早春」が最もい、、君の輕燥な筆が次第に沈厚になつて、何ともいへぬい、味を見せてゐる（十五日まで飯田呉服店）

【「展覽會彙報」『繪畫清談』七―五　大正八年五月】

※「文藝消息」（『萬朝報』大正八年四月一二日）の再録

珊瑚會展覽會

高島屋の三階に近作三十點あまりを展觀してゐる、その中の半は東京を畫題とする作品である、浩一路の『東台春光』は樹間に花を看る人の雜沓を描いたもの、恆友の市外雜景三點は何れも氣の利いた小品である、芋錢が芝浦の潮干狩を描いてゐるのも興が深い、千甕の隅田川は繪馬の彩色を思はせる龍子の『光風』は日比谷公園の鶴の噴水を描いたもので色の柔い感じが如何にもい、心持を與へる、同君の屏風『鶯花曉色』は金地に二三の草屋三四本の梅樹を描いて素朴な中に豪健な而もうら寒い感じを湛へた非常な佳作である、石塚翰の中では『瓦燒く』がい、上下に明暗の對照を附して、水邊の瓦燒場の狀景を心持よく表してゐる、千甕の『海村夕照』は自由な洋畫風で新味を示してゐる、春仙の『緑の中の光』は松の木の間に大佛の頭部を出した大作で一種の莊嚴な氣持をよく捉へてゐるが、松が前後同じ樣に描かれてゐるのは考へものだ、浩一路のでは『姥子早春』が最もい、、君の輕燥な筆が次第に沈厚になつて、何ともいへぬい、味を見せてゐる。

【「展覽會だより」『書畫談』三―四　大正八年五月】

※「文藝消息」（『萬朝報』大正八年四月一二日）の再録

挿図4　池田永治《春惜絵巻》　『新作精華』2-2より

挿図5　小川千甕《海村夕照》　『新作精華』2-2より

挿図6　小川芋銭《抱甕痴》　『新作精華』2-2より

挿図7　川端龍子《光風（日比谷公園）》　『新作精華』2-2より

挿図8　名取春仙《緑の裡の光り》　『新作精華』2-2より

挿図9　山村耕花《髪》　『新作精華』2-2より

挿図10　森田恒友《釣橋》　『新作精華』2-2より

挿図11　近藤浩一路《東台春光》　『新作精華』2-2より

挿図12　石塚翰《晩鐘（御茶の水）》　『新作精華』2-2より

第六回展　会期：大正九年一月二五日～二九日
会場：日本橋・高島屋

▲珊瑚會展覽會　二十五日より二十九日まで南傳馬町高島屋呉服店に開催
【「文藝消息」『萬朝報』大正九年一月二三日】

▲珊瑚會　廿五日より廿九日迄で五日間高島屋呉服店にて第六回展覽會開催今回は「酒」に題したる作品なりと　【「美術」『中外商業新報』大正九年一月二四日】

▲珊瑚會第六回展覽會　廿五日から廿九日迄南傳馬町の高島屋で開く

【「消息」『都新聞』大正九年一月二五日】

◆珊瑚會繪畫展覽會　川端龍子、山村耕花、森田恒友氏等の同會は廿五日より二十九日まで高島屋呉服店に於て同人の作品展覽會を開く

【「事実と風聞」『やまと新聞』大正九年一月二六日】

珊瑚會も六回を開いた。試作として「酒」に關する作品を會員が思ひ〳〵に發表してゐるが、芋錢氏の「飲中八仙」、池田永治氏の「街頭酒薄」、浩一路氏の「春宵宴」等が面白味の深いもの◇今回は何と言つても浩一路氏の十點がどれもこれも長足の進轉を其技巧上に見せたのは小氣味がいゝ、「枯野」と「島影」を筆頭に擧げて置く◇石塚翰氏の「赤光」、龍子氏の「秋光搖溶圖」耕花氏の「湖の夕」、千甕氏の「柳緑多々」は夫々に記録して然る可く◇百穂氏の紙本尺八の「王延」は異彩を放つて居り、恒友氏の「田家冬日」三點はもう何事も言はずに感服するばかりだ。（廿九日迄高島屋で）

【「展覽會二つ」『讀賣新聞』大正九年一月二八日】

◆珊瑚會第六回展覽會を觀た今年は同人諸氏努力の結果一段の氣焔を上けて居る近藤浩一路氏の十餘點はどれも落付いた筆觸と賦彩で中でも「朝色」「暮色」及び「水郷」「島影」が好く川端龍子氏の「秋光搖溶」「猿酒」亦異つた取材に得意の手腕を見せ森田恒友氏の「田野冬日」三幅對は輕快な筆致に餘韻を漂はして觀者を惹き付けて居た其他山村耕花氏の「湖の夕」平福百穂氏の「王延」池田永治氏の「盤梯三趣」小川千甕氏の「柳緑多々」夫々趣を見せて面白いと思つた（廿九日迄高嶋屋内に）

【「珊瑚會展覽會」『時事新報』大正九年一月二八日】

第六回珊瑚會

常の出品の外に、「酒」といふ課題で各自にとり〴〵の作を發表されたのは面白い試であつた。中で最も注意を惹かれたのは、川端龍子君の「猿酒」と、近藤浩一路君の「春宵宴」とであつた。「酒」は、本號の口繪に載つて居るが、大きい樹の幹にある凹みに栗やら何かの秋の果實を溜らせて、その傍にヂツと見まもつて居る猿の姿が、極めてよく整つた構圖で表現されてゐる。可なりの大畫面に惜氣もなく金色を使つて彩つてある處に生氣が漲つてる。

課題以外の作では、浩一路君の「暮色」「水郷」「裸冬木」、森田恒友君の「田家冬日」中の「枯れ蘆」、石塚翰君の「晴雪」「東風」などが佳かつた。龍子君の「秋光搖溶圖」は、神祕の感じを誘ふ繪だ。秋の林中、澄める流れに近い岩影、裸女の光を浴びる情趣が豐かに描き出されて居つた。

私は此の會場を見たあとで、最も強い印象を遺されたのは、浩一路君の「春宵宴」であつた。濃淡の墨色にたゞ金泥や金粉を僅かに配したばかりのもので、筆致も漫畫風の輕いものであるが、描き出されてゐる情趣は、極めて深いものであつた。常の繪ならば、賑かであるべき宴席の光景が、興酣なる時、もうその底に流れてゐる寂寞の感じの色で塗り潰されてゐる處に、言ひ知れぬ面白味があつた。墨繪で描いた櫻の若木も一しほの趣を添へ、淋しさといふよりも、いつそ凄いやうな感じに襲はれながら、私は此の繪を飽くこともなく見入つたのである。

【はつね「幾菊軒鑑賞志」『美術畫報』四三―四　大正九年二月】

●第六回珊瑚會展覽會　一月二十五日より二十九日まで、京橋高島屋呉服店にて開會。

【「時報」『美術畫報』四三―四　大正九年二月】

■珊瑚會展覽會　珊瑚會も六回を開いた。試作として「酒」に關する作品を會員が思ひ〳〵に發表してゐるが、「芋錢氏の飲中八仙」、池田永治氏の「街頭酒薄」、浩一路氏の「春宵宴」等が面白味の深いもの今回は何と言つても浩一路氏の十點がどれもこれも長足の進轉を其技巧上に見せたのは小氣味がいゝ、「枯野」と「島影」を筆頭に擧げて置く石塚翰氏の「赤光」、龍子氏の「秋光搖溶圖」耕花氏の「湖の夕」、千甕氏の「柳緑多々」は夫々に記録して然る可く百穂氏の紙本尺八の「王延」は異彩を放つて居り、恒友氏の「田家冬日」三點はもう何事も言はずに感服するばかりだ。

【「彙報」『現代之美術』三―一　大正九年一月】

※「展覽會二つ」（『讀賣新聞』大正九年一月二八日）の再録

珊瑚會の第六回

高島屋呉服店

恒友氏の眞摯で沈靜な態度で自然と親しみ、毫も世間を顧慮しないのは尊とく、その作品に特種の情調と風韻とを與へる、「雲」「水」も好いが、「草」には最も幽寂淡雅の趣がある。浩一路氏は今制作の興に燃えて居る「朝色」「霜枯」「新緑」等も趣があるが「暮色」最愛すべく「裸冬木」は龍子風で金泥を以て陽光の反映を現はし、龍子氏の「秋光搖溶」も金泥で裸女を取扱つて居る。永治氏の「三春の雪」は素朴輕淡の味がある、千甕氏の「田舍樂」は洒脱、芋錢氏は例の如く、翰氏のは「晴雪」を取る。百穂氏は未着だつた。

【「展覽會月評」『美術月報』一―七　大正九年二月】

珊瑚會（第六回）

逐年隆盛になつて來た同會は今年は「酒」を課題として第六回の展覽會を京橋の高島屋呉服で一月二十五日から開いた。

九氏四十點の作を通覽するに、課題の「酒」以外の作品に於て、池田永治氏の四點の出品のうちでは、盤梯三趣の内「中の澤」のリズミカルな山の趣きが氣持がよかつた。「三春」は冬の情景が可なり俳趣味化されてゐた。石塚翰氏の「赤光」は大作であるが惜しいかな遠景の失敗のために近影の優れた表現も効果が沒せられた。小川千甕氏の作三品は少し亂雜になつて統一が失はれてゐるために蕪雜の感が深いのは殘念である。「好晴一日」を擧げやう。川端龍子氏の「秋光搖落圖」は圖柄の擇び方の新味と、大膽な表現と、澁い赭色と金との階調を生命としてゐる。女の描法など從來の日本畫家の描き出したものとは大部趣を異にしてゐる。三尺幅の大作である。山村耕花氏の「湖の夕」は樹葉のリズミカルな表現が面白く大きく黒い塊りの感じがある暗示を與へる樣に見える。近藤浩一路氏は最も多數の出品者である。金泥の御仕事の「裸冬木」以下院風の影響の著しいものが多い。「島かげ」は日本畫では新らしい題材であるが洋畫を描いた氏は洋畫の一世紀前に好まれた此種の情景を日本畫の上に取り入れた時には微笑むことであらう。「朝色」は氣品の高い佳作であつた。他に「枯野」「早春」等の佳作が多かつた。森田恒友氏の「雲」「水」「草」共に氏の忠實な自然觀照の産物でデツサンを見る樣な氣がして敬虔の念に打たれる樣な作であつた。これと好一對な作に平福百穂氏の「王延」「王祥」がある。これはまた氣品の氣高さに於て場中並び尠きものである。甘味に飽きた時に煎茶を喫する樣な氣がした。外に小川芋錢氏の作があつた。「酒」の方では石塚翰氏の「ほろよひ」端的な人物畫で澁味に富んだ作で、川端龍子氏の「猿酒」は老猿と樹木の素朴化と構圖とに好い表はれが看取せられた。近藤浩一路氏の「春宵宴」は横物に酒宴の廓を描出してゐるが、人物が一々思ひ當るので興味が深かつた。同人努力の作を出陳する點と、課題を課して試作する研究的態度とは會を發展せしむる上と、内容の充實とに於て誠に好絶果（ママ）を生むで居るのは佳い事である。近來の快よい展覽會の一つである。廿九日迄（大暲生）

【「展覽會月評」『中央美術』六―三　大正九年三月】

珊瑚會展覽會

珊瑚會第六回展覽會を見た今年は同人諸氏努力の結果一段の氣焔を上げて居る近藤浩一路氏の十餘點はどれも落付いた筆觸と賦彩で中でも「朝色」「暮色」及び「水郷」「鳥影（ママ）」が好く川端龍子氏の「秋光搖溶」「猿酒」亦異つた取材に得意の手腕を見せ森田恒友氏の「田野冬日」三幅對は輕快な筆致に餘韻を漂はして觀者を惹き付けて居た其他山村耕花氏の「湖の夕」平福百穂氏の「王延」池田永治氏の「盤梯三越（ママ）」小川千甕氏の「柳緑多々」夫々趣を見せて面白いと思つた

【「美術界彙報」『繪畫清談』八―三　大正九年三月】

※「珊瑚會展覽會」（『時事新報』大正九年一月二八日）の再録

美術院出品畫でも漫畫の臭ひがほのかに付きまとふてゐる所に見どころがあつたのです。今年一月の珊瑚會の多數の出品の中には大分その強味が稀薄になつて、技術のうまみを出さうと努力した跡が見えましたが、それは人も私もあぶないものだと認めたのでした。あの時の「裸冬木」と「島影」との尺八二幅は當時の新作で代表作とすべきでせうが、あれ等は私にいやでした。金泥と墨とを滲ました手際はうまかつたが、手際がよいだけ不快でした。まるで寫眞を見る樣で、しかも寫眞のい

やな分子だけを採り出した様に見受けました。

【小川千甕「近藤君の如才無さ振」『中央美術』六―六　大正九年六月】

挿図13　川端龍子《秋光搖落》　『中央美術』6-3より

挿図14　川端龍子《猿酒》　『美術畫報』43-4より

挿図16　森田恒友《枯れ葦》　『美術畫報』43-4より

挿図15　平福百穂《王祥》　山種美術館蔵　『中央美術』6-3より

挿図17　近藤浩一路《暮色》　『美術畫報』43-4より

第七回展　会期：大正一〇年四月二二日～二七日　会場：日本橋・高島屋

◆珊瑚會第七回展覽會　廿三日より高島屋呉服店で開催する

【「文藝美術」『中央新聞』大正一〇年四月二二日】

◇珊瑚會　第七回展覽會を廿二日から廿七日迄高島屋に開催

【「文藝消息」『萬朝報』大正一〇年四月二二日】

▲珊瑚會繪畫展覽會　本日から廿七まで京橋高島屋呉服店に開かる

【「よみうり抄」『讀賣新聞』大正一〇年四月二三日】

◇珊瑚會展覽會　第七回を廿二日より廿七日迄高島屋で開く今回は各自雲を畫題にした試作を發表すると

【「美術界」『やまと新聞』大正一〇年四月二五日】

珊瑚會第七回

◆池田永治氏の横物五點はその後の進境を示したもの「箱根早春」「いでゆ道」を採る◇石塚翰氏は小點「温泉」もいいが「雪國繪卷」でした勞作に眼を向けやう◇小川千甕氏は矢張り「水國麗日」を擧ぐべく川端龍子氏の「石」は見當らぬ◇鶴田吾郎氏の「朔原三題」に「雲」と「晝」は鳥の子全紙に「夕」も紙に滿洲の大景を收めて新たに日本畫の領域を踏み出した◇近藤浩一路氏の連作は「宍道湖四題」よりも「野の國三題」が親しめ「牡丹」亦も技巧の熟しつゝあるのを知る◇平福百穂氏の六曲一双「梅鶴」は悠揚とした全體からも細部を見ても鍛練の功を誇つてよからうと思ふ◇今回の課題は「雲」で「山雲帖」（恒友）「青山白雲」（龍子）「三國第一山」（永治）「雷を包む雲」（芋錢）などかある（廿七日迄高島屋）

【「美術界」『讀賣新聞』大正一〇年四月二五日】

珊瑚會第七回展覽會

▲「雲」といふ課題で諸氏がいろんな違つた行き方で思ひ思ひの作品を出品してゐる、中で川端龍子氏の「青山白雲」二曲一双が外觀内容共に壯大な姿に場内を威壓する、だが洋風建築の裝飾畫としていゝなと思つた位で別に内容に惚込んだ譯ではない寧ろ色調の刺戟の強さに鉛毒の女の顔の如き不快を感じたといふことを附加へて置く、小川千甕氏の「土手の上の稻こき」は筆致はアクが抜けてゐるが構圖が或種の型に箝つてゐる鶴田吾郎氏の「朔原三題」には其展望の廣いエキゾチツクな題材と意志的な筆致との融合に、かなり魅力を感ずる

▲平福百穗氏の「梅鶴」は金屏六曲一双の大作で均齊の美を語る、場所の錯語を感ぜしめる程である、近藤浩一路氏の「宍道湖四題」「野の國」何れも小品ながら鮮やかなもの、小川千甕氏の「田家晩凉」は田園畫趣の一寸したところを捉へて一味清新の趣あるを喜ぶ、石塚翰氏の「雪國繪卷」は努力を買ふ、意到つて力之に伴はずといふ趣はないでもないが

▲池田永治氏の作にはすべてを概念化する缺點が見え透く、表現の奇を追ふ前に今少し實在のあるが儘に對して忠實な凝視を努めて欲しい、「いでゆ道」「箱根金時山」などよろし此外に森田恒友、小川芋錢諸氏の飄逸なものがあつた（二十七日迄京橋高島屋にて）

【「美術界」『萬朝報』大正一〇年四月二六日】

餘程洒落氣がなくなりいゝ加減なもので濟す風が失たのは此會の生長である。近藤浩一路氏は小品ながら十枚出して獨り振ひ、宍道湖四題のうち「雨」、「島」など佳く、野の國三題中「曳舟」は野趣横溢而も氣品あり、洋畫では現はせない味がある。「牡丹」は色を用ひずして色を出す。池田永治氏も努力を示し、多彩的になつた、カラースキームで成功してゐるのは「いでゆの道」である。小川千甕氏の「田家晩凉」、石塚翰氏の「雪國繪卷」は共に進歩を語るもの、鶴田吾郎氏の「朔原三題」の内では先づ「雲」を取る。川端龍子の「青山白雲」は未完成だといふから斷言出來ないが、白雲の上に頭をむくむくと擡げてゐる山はいゝとして金泥の松は雲の海の中のものと見えず蛇足の感なきを得ない、平福百穗氏は六曲一双に「梅鶴」を描いてゐる。なほ森田恒友氏の「山雲帖」は逸品だ。（高島屋二十七日まで）

【「珊瑚會第七回展覽會」『東京朝日新聞』大正一〇年四月二七日】

第七回展覽會を高島屋で開く、遉に揃つて垢抜けのした技巧を見せてゐるが、各作品の持つ雰圍氣は餘程似通ひ、個性といふ點からでは相互に可成り影響し合ひ、際立つて優れてゐるといふ意味から作品を擧げるのに苦しむ、永治氏「阿賀川べり」前景の虹は鳥渡考へさせられるが相應に效果を納め千甕氏「砂丘」の朧ろな水平線が場面を狹めたのは惜しい、吾郎氏「朔原三題」中「晝」に威壓を感じ浩一路氏「宍道湖四題」では「雨」と「野の國三題」では「曳舟」に惹付られるが後者の色彩は可成り單調だ、芋錢氏「雷を包む雲」も面白い

【「珊瑚會の作品」『やまと新聞』大正一〇年四月二七日】

●第七回珊瑚會展覽會（四月二十三日より同二十七日まで）。

【「時報」『美術画報』四四―七　大正一〇年五月】

第七回珊瑚會繪畫展

四月二十三日より二十七日まで、高島屋呉服店にて開かれた。平福百穗君の「梅鶴」を畫いた金地の六曲屏風の一双、濃彩色の圖は、平凡だが、清楚な小品ばかり多い此の會場では、何んとなく貫目が見える。之れと對して重味のあるのが、川端龍子君の「青山白雲」だ。二曲屏風一双の全畫面が、淡い溪流の自然の色と、黒と金とで單純に彩られて、岩の焦墨色の上に金彩の古風な松が描かれてあつて、その配色は金蒔繪でも見るやうで、一種の模様化された繪であつた。

近藤浩一路君の作では、「穴道湖四題」の内で、出雲富士らしい峯を遠くに望んだ橋の景を見せた「夕」といふのが最も佳く、外に墨畫の小品「山路」と「華嚴瀧」や、「野の國三題」等もあつたが、概觀して、幾分か同君の特色に固着し過ぎた感じがあつた。つまり前回の此の會から今日までに、作風上の顯著な變化の無かつたことを暗示してゐるやうで物足り無かつた。小川千甕君の「水國麗日」、鶴田吾郎君の「朔原三題」も佳かつた。

森田恒友君の「山雲帖」は輕妙なる筆致で、巧みに田園住居の氣分を描き出して

ゐる。（本號の口繪にその内の二圖を収める筈になつてゐるさうだ）。石塚翰君の「雪國繪卷」は、水墨の大卷で、瀟洒な筆が縱横に働いてゐる。同君の小點「温泉」は三人の女と幼兒が一人、浴みしてゐる光景で、淡い岱赭で塗つただけの簡單な筆使ひではあるが、山國の女の裸體を巧みに描き出してゐた。

【榎本慧村「忘舊樓小記」『美術畫報』四四―七　大正一〇年五月】

珊瑚會第七回展　高島屋

近藤浩一路氏の「宍道湖四題」は佳く出雲の情趣を現はしてゐる。殊に「夕」の如く大きく掴んだ所がいゝ。森田恒友氏の「山雲帖」は吾々をして舊知に逢うた時の様な親しさを感ぜしめる。川端龍子氏の「青山白雲」は松の木が全體としつくりしない感がある。平福百穂氏の「梅鶴」には作者が如何に興味なくこの繪を描いたかと云ふ事が想像できる。鶴田吾郎氏の諸作は未成品の感があるとしても何物か語られる所がある。石塚翰氏の「雪國繪卷」はその眞面目さを喜ぶ。小川千甕氏の「砂丘」は佳作。

【「展覽會月評」『美術月報』二―一〇　大正一〇年五月】

□珊瑚會は、平福百穂、川端龍子、森田恒友氏等現代の鏘々たる新日本畫大家の集り丈け極めて調子が高く、のびやかでもある。平福氏の『梅鶴』は、つつしんで描いた六曲の金屏風だが、品位はさすがに擧れるものあり、森田氏の『山雲帖』は氣も心も輕らかに旅の寫生を眞に、衷心より凝視し表現したものらしく面白い。川端氏の『青山白雲』の見られなかつたのは殘念。この外、近藤浩一路氏の『宍道湖四題』が面白かつた中でも夕、雨、それから『野火』といふのが心を惹いた。小川千甕氏の諸作も捨てがたく、『水國麗日』など愛すべき小品だ。小川芋錢氏の『暮春の雲』、池田永治氏の『箱根』鶴田吾郎氏の諸作などもあつた。

【「蒼空邦畫會と珊瑚會」『審美』一〇―五　大正一〇年五月】

▲珊瑚會展覽會　四月二十二日から二十七日まで高島屋で開いた。

【「美術界消息」『中央美術』七―六　大正一〇年六月】

珊瑚會（第七回）

春の小展覽會に異彩を放つ隨一として識者に期待さるゝ此會も七歳に長じてモハヤ惰氣を現はして來た。どの會でもさうだが二三年も暮すうちには創立當時の熱が漸く減却して感情稀薄の歎あらしめるが此會も其識りを免れ得ない。川端龍子君の二曲屏風は金泥の雲霧を抽んづる山巔を描いた豪快なもので、雲に因む課題の作品だが未成品と云ふ事であつた。然し未成とは云ふものゝ幾分のアクセントが施されぬ位の事らしく、豪放な氣魄は畫面に漲り渡つてゐた。平福百穂君の『梅鶴』六曲一双は氣品高い一家の風格を發揮して他の追隨を許さぬものであつた。近藤浩一路君の『野の國三題』は新日本畫の道程を示すものと云ふべく小川千甕君の『麥扱く丘の上』には個性の躍動が見られた。池田牛歩君の『いでゆの道』石塚翰君の山國の畫卷は眞面目な制作態度に觀るものを動かした。鶴田吾郎君は大畫面の數點に可なりの努力を思はせたが日本畫の筆技には未熟の歎なきを得なかつた。―自四月廿二日至廿七日、於高島屋呉服店

【「展覽會月評」『中央美術』七―六　大正一〇年六月】

挿図18　森田恒友《山雲帖》『美術畫報』44-7より

第八回展　会期：大正一一年一〇月二二日～二九日
会場：日本橋・三越

●酒井三良君と珊瑚會　或る意味で无聲會の後身とも見られて來た、日本畫の團體珊瑚會は平福百穂、森田恒友、山村耕花、小川芋錢、小杉未醒、小川千甕、川端龍子、鶴田吾郎、池田牛歩、石塚翰、近藤浩一路氏等選ばれた作家ばかりを會員としてゐるが、今回新進の青年作家酒井三良君を新會員として迎へ入れる事となり今秋十月三越で第八回展覽會を開催する。酒井君は會津在の人で大正八年第二回國展に「雪に埋れつゝ正月は行く」が入選したのが抑も君の美術界への踏出しで昨年第八回院展入選の「災神を燒く殘雪の夜」で一層鮮明にその特異な作風を認められた謂はゞ郷土藝術家である。君が都會生活を欣ばす會津の山奥で專念繪筆に親んでゐるといふのも、畫家とならうが爲めの教育らしい何物も受けず殆んど全く獨學で進んで來たといふのも君を知りその獨創の藝術を見る者の等しく推稱するところだ。何にしても金鈴社が解散し如水會が潰滅した今日唯一自由團體珊瑚會の今後こそ多事でなくてはならない。

【「時報」『美術畫報』四五―九　大正一一年七月】

◇珊瑚會第八回展覽會　二十二日から二十九日まで七日間（二十五日休）三越ギャラリーで催す

【「美術界」『東京朝日新聞』大正一一年一〇月二二日】

○珊瑚會第八回展覽会　は三越七階ギャラリーで十月廿二日から廿九日まで催される出品会員は池田永治、鶴田吾郎、小川芋錢、小川千甕、川端龍子、近藤浩一路、山村耕花、平福百穂、酒井三良、森田恒友、石塚翰の諸氏

【「美術界」『報知新聞』大正一一年一〇月二二日】

珊瑚會八回展　三越

洗練された手頃の作品が緩りと列べられて甚だ氣持よく鑒られた、小川芋錢氏の「二仙」は氏としては稍雅趣尠く、小川千甕氏の「古池」は幽邃、川端龍子氏の「鶏舎」は優れた出來で殊に白鶏の印象強き描寫には牽付けらるゝ、山村耕花氏の「あわ雪」は情趣を湛へ、近藤浩一路氏の「里塚」「東海道」「森」は墨繪の雅趣を縱ままにし、酒井三良氏の「子守」平福百穂氏の「しみづ」鶴田五郎（ママ）氏の「義州街道」森田恒友氏の「水」等を注目した。

【「展覽會月評」『美術月報』四―一一　大正一一年一〇月】

第八回珊瑚會

十一人の「土の藝術家」を以て成る現在で一番氣持のいゝ邦畫の團體「珊瑚會」もこれで八回である◇紙本が多いのもこの會らしくこの人達にしてほんたうに味はせてくれるものと言へる◇池田永治氏は『カンナ』一點を見せたが氏らしい見方なり現はし方なりがそのまゝ出てゐる◇石塚翰氏は數點あるが『踊』のやうな作もこの人にあるのかと少し勝手が違ふ氣がした◇小川芋錢氏の『二仙』は今更別に何も思はせない◇小川千甕氏は益々達者になつて行く『古池』『砂丘』『落し水』の小點も結構だが『梨花帶雨』がいい『桃花源』は聊か困る◇川端龍子氏は新鮮不染の花鳥畫の道を進んでゐて『鶏舎』殊によく『庭前秋色』も内面美に打たれる『牛』も『つのづきの卷』に現はされたものより嬉しい◇鶴田吾郎氏は五題から成る『朝鮮の思ひで』で直截な筆法に前回に見た作品よりはずつと平坦な行き方を示した◇山村耕花氏の『あは雪』は嫌味のない手際のいい上品な愛すべき作である◇近藤浩一路氏の『里塚』『東海道』『森』の三作は曾ての作のやうな艶や脂が抜けかけたのを語るかに見え沈着に向つてゐるのを注意した◇酒井三良氏の『子守』『秋樹』『そば』は矢張り氏の取材だそして苗木のやうな伸び方を眺めさせる◇平福百穂氏の『しみづ』は水繪の面白さだ◇會員の合作畫帖「水」には森田恒友氏も這入つてゐるが百穂氏のはまだない（廿九日迄三越七階で）【「美術界」『讀賣新聞』大正一一年一〇月二四日】

▲珊瑚會展覽會　廿二日から七日間三越で開催

【「椎の實」『中外商業新報』大正一一年一〇月二四日】

洋畫家の試みたる日本畫、或はそのやうなる趣味の日本畫が多數を占めてをる、もつと大模様に、作者の視界が廣まればよいと思ふが、とかく畫面の上に小さく固

まり、繪らしい構圖を無理に組立てゝゐるのは物足りない、酒井三良氏の「そば」などは面白さうなところもあるが、よく描けたものではなかるべく、小川千甕氏の諸作は殊に小さい感がある、山村耕花氏の「淡雪」は技巧的のものであるが、手際がよく、川端龍子氏の「庭前秋色」等も達者のものである、鶴田吾郎氏の「朝鮮の思ひ出」五點は單にスケッチで、小川芋錢氏の「二仙」平福百穗氏の「しみづ」等もあるがあまり感心もできない近藤浩一路氏の「里塚」「箱根舊道」等は此趣味のものとしては割合によい方であらう、會員合作といふ書畫帖は是等の人の畫作の態度に丁度似合ひのやうに思はれる（三越呉服店七階にて、廿九日まで）

【「珊瑚會日本畫展覽會」『萬朝報』大正一一年一〇月二七日】

新しい日本畫の團體として注目されて居る珊瑚會の展覽會は廿三日から廿九日まで三越の七階で開いて居る、今年は紙本の即興的のものが多い中に川端龍子氏や石塚翰氏が中々力作を示して居る殊に龍子氏の「庭前秋色」と「鶏舎」はその自在に手法を極度までに發揮し「庭前秋色」の黄櫨漆の葉の如きは是でも日本畫かと思はるゝばかりの自由な色を出して居る、平福百穗氏の「しみづ」は人物が躍動し、山村耕花氏の「あわ雪」は洒落た作である此外小川芋錢氏の二仙は黄初平など思ひ切つて變つた構圖を見せ新加入の酒井三良氏の「そば」はよくその本態を掴んで居る（寫眞は川端龍子氏の鶏舎）【「第八回珊瑚會」『都新聞』大正一一年一〇月二七日】

◇日本畫珊瑚會展覽會　第八回は三越に開催中重なる作品は川端龍子氏の『牛』山本耕花氏の『あわ雪』小川千甕の『砂濱』平福百穗氏の『しみづ』小川芋錢氏の『二仙』等である　【「文藝界」『やまと新聞』大正一一年一〇月二八日】

▼珊瑚會日本畫展　一〇・二七―二九、三越七階で。

【「藝術界消息」『中央美術』八六　大正一一年一一月】

珊瑚會展覽會

珊瑚會の同人は『土の藝術家』だと云はれてゐるが、道に、自然の姿に愛着した純な心持から生れた詩的な作品の展覽會として非常に親しみのある會だ。今年は第八回で、去る廿二日から廿九日まで三越に開かれてゐた。

石川翰氏の數點では『幼兒』が殆ど白描であるが僅かの淡紅色で柔かい肉の感じを表はしてゐた。『初秋』と『晩秋』は佳作であるが『桑畑』には聊か生硬の處があり、『踊り』は此の會には不釣合の觀があつた酒井三良氏の『そば』は畫としては面白く描いてゐたが蒿菱の自然性に乏しい。『子守』は墨色を滲ました巧さだけである。小川千甕氏の數點では『落し水』が優れてゐる、『桃花源』などは嫌である。山村耕花氏の『あわ雪』は手際のよい落着いた美しい作である。川端龍子氏の『庭前秋色』と『鶏舎』は場中で最も色彩の強いので目立つてゐる雄渾の揮灑で一種の力を感じさせると同時に精警な觀察で可憐な詩趣を捉へてゐる。『牛』は院展の作より一際練れてはゐたが作爲が目についた。鶴田五郎氏の『朝鮮の思出』數作は洋畫家としては洒脱に行つてゐる方であらうが聊か生硬である。小川芋錢氏の『二仙』は院展の作とは大差である、太筆のものは皆斯うかしら。平福百穗氏の『しみづ』は草筆で輕妙な手法であるが大地の感じが出てゐる。近藤浩一路氏の『里塚』『箱根舊道』『東海道』は好い作であるが『森』に至つては少しく凝り過ぎると思ふ。池田永治氏の作では『カンナ』が面白い。合作博では森田恒友氏と芋錢氏とが一番書き慣れてゐる。（一記者）　【「珊瑚會展覽會」『繪畫清談』一〇―一一　大正一一年一一月】

挿図19　川端龍子《鶏舎》
『都新聞』大正11年10月27日付より

▲珊瑚會展覽會　第八回同會は先月下旬三越七階に開催された、日本畫壇では一番新らしい氣持のよい團體である、同人は池田永治、石塚翰、小川芋錢、小川千甕、川端龍子、鶴田吾郎、山村耕花、近藤浩一路、酒井三良、平福百穂、森田恒友の諸氏が其主なるものである。

【「諸展覽會」『帝國繪畫新報』一一―一二　大正一一年一二月】

第九回展　会期：大正一三年二月一日～八日
会場：上野・松坂屋

▲川端龍子氏　二曲一双の『竹林』（紙本）を珊瑚展に出品する

【「よみうり抄」『讀賣新聞』大正一三年一月三一日】

◇珊瑚會　第九回二月一日より八日まで下谷池の端松坂屋別館で小川芋錢、岡本一平、川端龍子、近藤浩一路、森田恒友、平福百穂諸氏で開會

【「美術界」『やまと新聞』大正一三年二月一日】

珊瑚會展

これ見てくれ式なデコデコもの、展覽會畫に食傷し切つた眼にかうした清疎な小展覽會はほんたうに親しめる◇一月永治二月一平三月恒友四月耕花五月三良六月浩一路七月翰八月千甕九月芋錢十月龍子十一月百穂十二月吾郎の『十二ケ月』會同人の合作で第一室を占めてゐるが半數しか出揃つてないのが物足りなかつた◇二室は新顔一平氏の『雜詩十題』が並べられ作者の内外生活を先以て正直に語つてゐる點に私の興味は集注された◇石塚氏の數作は可成り勉強したことはよくわかるが院展殊に院友仲間に溢る或る寫實風を追つたかに見えるのがイヤだ『霜』一點を擧げて置く◇酒井氏の對作『朝と夕』は北國の霜のあさと暮雪とを扱つた手際のいゝもので畫面からは垢がぬけ切つてゆきつゝある一方芋錢氏の影響とも知れるものが手法の上ばかりでなく著しく眼立つのも否めない◇鶴田氏の『石佛と風景』三作は無雜作に見せて實はネツイところのよく出た習作だ合作中の十二月のうまさとは又別だけれ共◇千甕氏の『春郊所見』『秋霧』（洛西小倉山）『母子』の三作も一層よく練れてきた靜かな境域を眺めさせる◇森田氏の『月明』『微雨』の兩作の前に立つといつもながらではあるが一筋の路がひた向きにひらけ切つてゐる事を思ふ◇川端氏の唐紙に試みた二曲一双『夕月』は場中での大作、竹叢に夕月を冷たく現はし山鳩の雌雄を姿勢からも位置からも無理なく配つた墨を主調として裝飾畫で次第に渾熟しつつある氏の花鳥畫に一轉機を劃した作と言つてよからう（八日迄松坂屋池の端別館で）

【「美術界」『讀賣新聞』大正一三年二月三日】

三日から松坂屋の池端別館に開かれて居る夫れ夫れ一特長を有する作家の集り丈に殊に面白い中に就いて川端龍子氏の夕月は六曲半双で場中第一の大作である、唐紙を用ゐ水墨を主として手一杯に竹を描き之に鳩の雌雄を描いた、竹は墨に金泥を流込んだ手際成程と肯かせる、森田恒友氏の「月明」と「微雨」感じのよい何處までも詩の境地である、十二ケ月合作の三月も麥壇の味何とも云へない、酒井三良氏の花鳥と朝と夕は朝と夕に技巧の冴えが見える花鳥は大觀氏なる作を偲ばせる今一工夫經ねばなるまい、鶴田五郎氏の「石佛」は一寸見ると樂々としあげたやうだが仔細に見るとかなり苦心が潜んで居り、且つ石の凹凸の出し方に流石に洋畫で鍛へた腕が見える、新加入岡本一平氏の雜詩十題面白い獨自の境だが半數は獨合點でもある、問答が一番共鳴させらる、平福、浩一路、芋錢氏のは見なかつた（紫）

【「展覽會二つ　現代紙本畫展と珊瑚會一瞥」『都新聞』大正一三年二月五日】

第九回珊瑚會展

十二箇月を十二人の同人に一枚づゝ描かせてゐるのは思ひつきだがまだ未着の分もあつた、出てゐる限りでは、矢張恒友、芋錢氏等が一日の長をあらはしてゐる。第二室は新加盟の岡本一平氏一室を占領して氣を吐き、酒井三良氏の三作中では「朝と夕」の雪景色の夕ぐれの景最も味深く、進境著しきものあるかに見える。進境といへば洋畫家鶴田吾郎氏も大に日本畫のコツを捕へ「石佛」なぞ見るべき作をなしてゐる、森田恒友氏のでは「微雨」優れて懷しく、川端龍子氏は流石にこの會

の重鎮、「夕月」は場中での大作であるばかりでなく氏近時の傾向を語るものとして記憶さるゝものであらう。（一日から九日まで松坂屋池の端別館）

【「會場一瞥」『東京朝日新聞』大正一三年二月六日】

▲不忍池畔の西北隅松坂屋別館に於いて珊瑚會は第九回の展覽會を開催中である、震災後いとゞ不自由を感ずる美術展觀の會場として此處は漸くにして選ばれたのであるが近く清方社中郷土會の展觀もあるさうで各室は採光の工合も悪くない▲珊瑚會は恒友、百穂、浩一路、三郎（ママ）、耕花、吾郎、龍子、千甕、芋錢、翰、永治、それに新加入の一平を加へて十二同人、其名を列ねただけでも現日本畫壇で注意さるべき會である、併し此の會では諸同人が必出品の拘束もなしに意に叶つた作品を發表するといふ不文律があるのか畫意の動かなかつた際は平氣に御免蒙るらしく全同人連作の十二ケ月に約三分一を缺いてるのでも然う思はれる▲今入りの一平氏が「雜詩十題」十畫面の出品は努めたりといふべく中には悪落ちと觀察されるものもあるけれど各畫に例の慧眼を以て人の腸を抉る調子はある、龍子氏の「夕月」は力作第一であつて僅かに淡彩を交へた濃淡墨の効力で坐ろ寒い竹林の晩景を髣髴し無理のない双鳩の配置によつて新花鳥畫の領分を開拓して居る▲しみ〴〵とした感味のあるのは恒友氏の「月明」と「微雨」の二作で殊に「微雨」は季節の説明も適切に、畫中の箒を下してる男と傘をかたげた人物との間には談笑の聲も聞ゆる心地がする、鶴田吾郎氏が大谷の石佛を畫材とした「佛山」の才筆と仰望して下筆した「石佛」の寫生にはその辣手に感ずる▲酒井三郎（ママ）氏は邊土に處して都會藝術の纖巧に憧るゝが如く表面的に頗る器用の度を倍したけれど土の臭味の失せたのは可か否か、三作中では「朝と夕」の暮雪を第一と看た（八日まで）

【「日本美術展と珊瑚會展」『國民新聞』大正一三年二月九日】

珊瑚會繪畫展

廿日から日本橋の松阪屋呉服店特設館を會場として第十回（ママ）作品展覽會を開く會員は

池田永治、川端龍子、酒井三良、石塚翰、鶴田吾郎、平福百穂、小川芋錢、山村耕花、森田恒友、小川千甕、近藤浩一路、岡本一平

十二名で出品は三十七點龍子氏の二曲一双淡彩「夕月」翰氏の「犬」三良氏の「花鳥」吾郎氏の「石佛」恒友氏の「月明」千甕氏の「母子」一平氏の「雜詩十題」並に會員十二名が尺五絹本十二幅に四季を描き分けた合作等變つた力作物が多い會期は向ふ一週間

【「美術と文藝」『大阪時事新報』大正一三年二月二一日】

△珊瑚會展覽會　二月一日より八日まで東京松阪屋にて開展、終つて大阪松阪屋にて會員は平福百穂、小川芋錢、森田恒友、川端龍子池田永治、山村耕花、石塚翰、岡本一平、小川千甕、酒井三良、近藤浩一路の十二氏。

【「展覽會いろ〳〵」『中外美術』一一―三　大正一三年三月】

珊瑚會　第九回展覽會を二月一日から八日まで上野池の端松阪屋別館に開いた今回から岡本一平氏が會員に加はり「雜詩十題」を出品した、川端龍子氏の紙本二曲屏風一双「夕月」は水墨淡彩の花鳥畫で努力の作であつた、森田恒友氏の紙本「月明」「微雨」鶴田吾郎氏の「石佛」等好評であつた、會員十二名が十二ケ月を分擔して各一點づつ揮毫した、但し浩一路、百穂、耕花氏等の出品は會期半ばを過ぎても陳列されなかつた。

【「美術界月報」『中央美術』一〇―三　大正一三年三月】

珊瑚會は、池の端の松坂屋の別館で開かれた。これは二月中の最も味の良い展覽會であつた。此展會には、いつも悪努力の作がなくていゝ。百穂、恒友、芋錢などゝいふ天分のいゝ人達の紙本水墨に心を洗ふ事が出來、浩一路、龍子などゝいふ秀才の、進取的な才筆に眼を洗ふ事も出來る。今年は漫畫王の一平さんが加盟して出品してゐるが、所謂「本畫」は未だ大いに未熟だといふ噂だ。

【「展覽會の噂」『アトリエ』一―一　大正一三年四月】

第一〇回展　会期：大正一三年一一月二六日～二九日
会場：日本橋・三越

◇珊瑚十四展　今春第九回開いたが更に各自の勉強の為め廿五日より廿九日まで三越呉服店で第十回展を開催の由

【「美術だより」『萬朝報』大正一三年一一月二四日】

▲珊瑚會　二十五日より廿九日迄、第十回展覽會を日本橋三越本店樓上に開催

【「風聞録」『國民新聞』大正一三年一一月二四日】

珊瑚會展　これで十回目だ、がこれも世の眼前の不景氣におびへたものか、それともわざと手加減したものか、小作がその部分を占めてゐる、が即興的な小品展として見れば一向に差支はない、二十六日から二十九日まで三越を會場にして。

【「美術界骨董界」『中外商業新報』大正一三年一一月二八日】

▲珊瑚會　十二名の同人中、芋錢、百穂の二氏が未出品なので聊か寂莫の感は免がれない。龍子氏の「秋興小品」九題は、紙本に賦彩を試みたもので、宋元の風を新らしく解釋したとも見るべき沈着いた作だけれど、此會の出品としてはいつも程の努力でない。好きな點からいへば「拓榴」を第一に推す。森田恒友氏の「麓野の初冬」こそは、斯の墨と斯の線とが、荒寥の冬天を映出して餘蘊なしである。近來其風を慕ふ追隨者が殖えても、及びもつかない處が氏の持ち味といふのだらう。浩一路氏のは京都在住の關係か、鐵齋や溪仙の影響が影さして來た。「高尾」は中で一番親しめる。耕花氏のはいつもながら能く其の趣味を語つて色調の美はしさは寧ろ過ぎたる程だ。「むべ」に氏の好みが最も發揮されてる。千甕氏の「二農婦」は院展の作を回想される作で、「二月の畑の邊にて」の方が深致がある。石塚翰氏のは「夜の温泉」鶴田吾郎氏のは「霜の朝」と「晩秋」を擧げやう。池田永治氏は一人油繪を出した。中で「秋の色」が面白い、と思ふ。岡本一平氏の「現代繪卷」はバーの中より後段の街路所見に辛辣さがある。

【「同時開會の三展覽會」『國民新聞』大正一三年一一月二八日】

珊瑚會（第十回）展

會員十二名出品卅點今年は二度目を開いて昨年休會の埋合せとある敢て批評も言はず記者は自分の好きなものを擧げて見る、先づ思はずも微笑まるゝは一平君の「現代繪卷」だ、バーの中でのストトン節、ラッシュアワーの電車、自動車の横行する街路の危險等途上矚目の光景を描寫してあるが我等も個中の一人かと思へば情けなくもあり冷汗も出る、川端龍子君の「秋興小品」五點中では菊と鯊とに興味をもつた金泥を施した紙本（唐紙）のくすんだ色に黄瓣の浮上つた菊の小品は豐滿な感が充實してゐた、浩一路君の三點中では宇治十三塔の俯瞰圖的山水が佳かつた、山村耕花君のは「蔦の實」の裝飾的構圖が佳いと思つた。森田恒友君の「麓野の初冬」は例に依つて獨自の境、鶴田吾郎君の紙本水量（ママ）五點の風景は筆者が斯く方向に進んで到達すべき可能境たるを知らしめる、然し聊かお粗末の感なきを得ぬ。小川千甕君では油繪風の彩料を用ひた「聖マルガレテ」を面白く感じた、院展出品の構圖を繰返した「二農婦」は智惠がないと思ふ。池田永田（ママ）君の三點は普通の出來、格別の感銘もない。石塚翰君の「筍掘り」は今一息と云ふ處だ。平福百穂君と小川芋錢君とは開會第一日には畫題のみ掲げ作品は恒例によつて未着であつた。氣心の合ふ人々の會としては今少し樂んで描いて繪を見せて欲しい、而して今一段眞劍であれかしと望みたい。十年も續いた會だ茲で一つ踏張り直さねば影が薄くなるばかりだ。

【「美術月報」『中央美術』一一〇　大正一四年一月】

第十回珊瑚會展覽會（自十一月二十六日至同二十九日於三越）

近頃洋畫の方の色々な展覽會は、屢々開かれ、充分（ママ）張したものもありますが、日本畫の方にはそれが比較的少い、その中でこの展覽會などは、確に充實したものであはまし（ママ）た。

鶴田吾郎氏は紙本に墨で行つて、「霜の朝」以下五點を見せて居ますが、いづれも中々努力したもので、新味があります。然し、どうも未だ洋畫の素描臭を脱して

居ません。と云ふ意味を云ひかへば、構圖と云ひ、物の形と云ひ、線と云ひ皆餘り變化なくのび過ぎて居て、味ひがないのです。「霜の朝」などは、氣分がよく出て居ると云へば云へますが、未だ眞の藝術的價値は低いものです。この事に就いては色々論じて居る餘裕がないから、結論だけ云つて仕舞へば、霜の朝なら霜の朝らしい氣分が、如何に如實に出て居ても、それがいやしくも五感を有する人間なら、誰でも感ずる樣な氣分であるならば、それだけでは價値が極く小さいと云ふのです。

川端龍子氏は秋興小品五點を出して居ます。いづれも例によつて堅實なものですが、矢張りまだ詩味が欠けて居ます。これは飽くまで理智で描て行くからでありませう、勿論これは氏の強味であつて、理智の欠けた畫は感心できないのですが、理智で練り上げて苦心の痕が、餘りまざ〳〵と見えて居て、樂しんで描くと云ふ氣分が見えないことは、少し物足らないのです。然しこんな境地を今氏に望むのは無理かも知れません。その中次第にその境地に入るのでありませう。

森田恒友氏は日本畫で「麓野の初冬」を出して居ますが、これにはどうも何時もの味がありません。何處がどうとはつきり指摘することは出來ませんが、どうも面白くない、つくり物と云ふ感じがする、つまりマンネリズムに陷つて居ると云ふのでせう。

近藤浩一路氏は細長い縦物に色を用ひて、「嵐山秋風」「宇治十三塔」「高尾」の三點を描いて居ます。新味はあり、面白味もないではないが、いつも程の感じはありません。元來新しい畫はどうしても横物の方が好いのがあります。それは、洋畫の寫實的な影響が加つて居る爲であつて、畫家もその方が描き易いのでせう。然し一方日本には床間と云ふものが有るので、横物では一寸困る事が多いから厄介です。兎に角、風景で今後こんな縦物に優れを作品が生れる機會は少いだらうと思はれます。

岡本一平氏は例の慢畫で「現代繪卷」を出して居ますが、私が今氏の繪で注意するのは、用ひられて居る描線で、あの線をどこまで發達せしめ、どれだけ生かして行くかと云ふことです。まだ現在の線では到底滿足出來ませんが、その中立派なのになりやしないかと思はれます。そうしたら氏の慢畫もユニバーサリテイーをもつ眞の立派は畫と成り得ます。その他山村耕花小川千甕、池田永治、石塚翰、酒井三良の諸氏の作品もありました。

【白井又一「美を求めて」『美術畫報』五五七　大正一四年一月】

□珊瑚會では恒友氏の「麓野初冬」は親しみ深く、龍子氏の菊と鯊、耕花氏の車ゐび、蔦の實、浩一路氏の「嵐山秋雨」等皆才氣を見せ、其他翰氏の「筍掘り」、吾郎氏の「晩秋」三良氏の兒守二題、千甕氏の「二婦」等があつた。

【犀水「巡展小録」『國民美術』二―一　大正一四年一月】

回想

◇

无聲會のしまひの頃、紹介されて、名取春仙君と杉浦非水君私などが參加したのでしたが、展覽會を開いて見ると、空氣がガラリと變つてしまつたやうに記憶してゐます。

あの時分の畫壇の先覺者であつた筈の无聲會も、私共が這入つた翌年でしたかに、解散説が出たりしまして、平福さんを中心とする私共の間に、何か、その儘ではなかつたまでも、无聲會のやうなものを、そつくりやるつもりでしたところが、結局長い歴史と名前だけを、福井江亭氏に預つてしまはれた次第でした。

珊瑚會といふ集團は、謂はゞ、无聲會の後身とも言ひ得るといふのは、つまり、以上のやうな、イキサツから發したからなのです。では、どういふ目的の、どういふ意味の團體かと問はれたならば、とにかく、年一回宛、大正四年に松坂屋で第一回を開いて以來、お互ひの作品で展覽會をやつてきて、昨年を一回休んたゝけで、去月の第九回まで、金鈴社などゝは、自　幾分異つてゐる點は、展覽會をするにあつた、發表機關であつたと申されませう。

◇

平福さんの宅へ集つた上で、會の名前に就て相談をし合つた時、平福さんが、何であつたか古い小冊子を取り出してきて、繪のことの古い熟語が澤山ある中から拾ひ出した、それが珊瑚と名づける事になつたのであつたと憶えて居ます。

◇

こんなこともあつたと言はれるのは、洋畫をやつてゐて、日本畫がどこまでやれるものかといふ氣持、それも強かつたのです。現に平福さんが、太平洋で勉強したこともあり、偶然にも洋畫から出發した、妙にそんな連中がメンバアの大部を占めてゐたのでした。最初は、七人、芋錢さんに、千甕君、春仙君、耕花君、池田君、平福さんに私でした。（最も、恒友君とも八人のわけでしたが、丁度森田君は洋行中でしたので、この席には見えませんでした。）

◇

當時、われ〳〵の間で、「三五で八」だなんて、シャレを言ひ合つたことや、松坂屋での第一回に、珊瑚會と聞いて、藝妓が盛んに見物にきて、思ひがけない繪の展覽會なのに、面喰つたやうな、罪のない話も、今は昔語りになつてしまひました。

◇

その後、名取君が或る事情のためにやめ、鶴田吾郎、石塚翰、近藤浩一路の三君が入り、一昨年、酒井三良君と、今春から岡本一平君を迎へて、都合十二名の會員です。

◇

不思議といへば不思議なのは、あとで珊瑚會員が相次いで、美術院の同人になつたことです。森田、山村、小川（芋）、近藤君に私と五人もがそれでした。これは、少し内輪ばなしですが芋錢さんを同人に推薦したのは齋藤隆三君や小杉君なのでして横山大觀氏は、芋錢さんの作にはまだ本統に諒解が無いといふので、丁度白木で開いた展覽會の時、一緒に見にこられて、芋錢さんの藝術を知つたといつたやうな、こんな話もあるとか聞きました。

◇

どうも、うろおぼえで困りますが、第一回には、春仙君の古事記に據つた神代のものや耕花君の『助六』が出ましたし、第三回には、森田君の可成り大きい紙本の風景の三幅が出されました。私が同氏の藝術をはつきり讀むことの出來たのもこの作品からですが、おそらくは世間でもさうでしたらう。この回ではじめての課題として、屏風をやらうといふ事だつたのが、一向みんな出來なくて集りませんでした。大正七年、第四回には卷物を課題としました。五回が高島屋で、課題は「東京」、六回は「酒」で七回が「雲」、八回が「水」、さうして今度の「十二ケ月」といふ順序です。都合、松坂屋で三度、琅玕洞で一度、高島屋も三度、三越で一度、白木屋で二度、展覽會を催したのが、この會の歴史です。

◇

何しろ、呑氣この上もない、おまけに頗る貧乏な會でして、中頃、横地信輔、中島重太郎の兩君に、會務をお世話願つたのと、近頃「きとも」中西一郎君を煩はしては居りますが、いつも無一物で通つきてゐます。

◇

横地君と中西君、岡本君、名取君、私が日本橋箔屋町の城東小學校の同窓なのも、ずゐ分舊い因縁ですし、序乍ら横地君は酒の「大關」の店の番頭さんですが、我々の作品に理解があるといふのは、ほんの小僧時代に、わづかばかりの小遣の中から毎月五圓宛を當時の芋錢さんに献じてゐて、何かその内お描き願ひたいと言つて出來たのが、かの『百魔繪卷』で、これは惜しい事に、今度燒いてしまひました。同君の有には、同じ作者の『飲中八仙』もあり、双つ乍ら珊瑚會に出品されて、評判だつたものですが、前者は展覽會としての珊瑚會が發表した最も意義のある作品でありました。談）

【川端龍子「美術界今昔話　珊瑚會のこと共」『鐘がなる』七　大正一三年三月】

□第壹回展覽會――大正四年松坂屋にて開催。出品の主なるものは名取春仙氏の六曲屏風一双。『田道間守』

□第二回――琅玕洞にて開催。吾郎氏の朝鮮風俗の寫生『洗濯』『髪すき』百穂氏の『羊』などが記憶にある。

□第三回――白木屋にて開催。芋錢氏の『雲影』と『肉案』春仙氏の『鮪の片身』龍子氏の『獅子』の二曲一双など。

□第四回――はまた松坂屋にて開催。芋錢氏の『百魔繪卷』百穂氏の『神語』恒友氏の『初夏水村』龍子氏の『大森八景』など出陳された。

□第五回――會場は高島屋。耕花氏の『髪』芋錢氏の『抱甕痴』永治氏の『惜春畫

巻』龍子氏の『鶯花暁色』（二曲一双）『光風』などがあつた。此の回より浩一路氏翰氏が入會された。

□第六回――再び高島屋に開催。耕花氏の『不死の薬』龍子氏の『猿酒』『秋光揺溶圖』百穂氏の『王祥』恒友氏の『枯れ芦』浩一路氏の『水郷』翰氏の『雪國の巻』千甕氏の『田舎樂』等が揃つた。

□第七回――三度び高島屋にて開催。百穂氏の大作六曲双『鶴』龍子氏の二曲一双『青山白雲』恒友氏の『山雲帖』永治氏の『いでゆの道』など。

□第八回――三越にて開催。吾郎氏の『朝鮮の思出』の五點。芋錢氏の『蝦仙人』と『黄初平』龍子氏の『鶏舎』『牛』翰氏の『こども』千甕氏の『梨花帶雨』耕花氏の『あは雪』等があつた。三良氏この會より入會。

□第九回――十二年は地震騒ぎで往つてしまつたので一年抜けて、九回をこの二月松坂屋にて開催。一平氏新顔として『雑詩十題』を陳べた。三良氏の『朝と夕』翰氏の『霜』吾郎氏の『石佛』千甕氏の『小倉山』龍子氏の二曲一双『夕月』等があつた。

【「珊瑚會展覧會年表」『鐘がなる』七　大正一三年三月】

无聲會が解散しまして、川端君森田恒友君近藤浩一路君等と珊瑚會を起しましたが、その頃から極端に單調なものが好きになりまして色なぞも代赭とか藍とかそんな色が好きになりました。又描くものも、路傍の石雑沓の人影とか、一本の裸本、痩せた赤松とかさういふものに興味を持つて來ました。珊瑚會の何回かに奉書に松八題といふのを描きましたが、松も赤松にかぎり、野中の一本だとか林に二三本立つて居る所、或は小松が揃つて立つて居る所といふやうな方面に向つて來ました。

【平福百穂「私」『巽』　昭和四年一一月】

小學校時代の同窓とはいへ僕と川端君とは同級ではなかつたんです。僕や岡本一平君は君より一級上でした。從つてその頃はほとんど交際はしませんでした。同窓だつた名取春仙君が君の所へ最初僕を連れて行つてくれたのです、何んでも无聲會の終り頃だと憶へてゐます。其の後珊瑚會が組織されて四回頃から私がおよばずながら幹事となりましたので、次第にあの人と交りにも深さを増して行つたといふわけあひになります。それが今日の交際を釀した動機であつたのでせう。私があの人に關心を持つたのは、珊瑚會の二回あたりでしたか、上野松坂屋に開れた展覧會に君の作品を拜見してからです。スケッチ板位の大いさの繪が七八枚出品されてゐました。蛙がひつくり返つて白い腹を見せて、水上に浮上つてゐる繪や、色々な奇異な構圖に異常な印象を與へられました。忘れられぬ畫家の一人として私の腦裏にしつかり刻みつけられたのです。　【横地信輔「雑話」『巽』三――一　昭和五年一月】

亂暴の話でもう一つ想も出しましたが、當時琅汗洞で『珊瑚會』を開催してゐた時です。速水君、僕等が同展におしかけて行つて、受附名簿に大變ないたづら書をしたのです。

琅汗洞の主人、大變に怒つて、吉田さんに談し込んで來ました。「それじや、詫證文を書け。」と云ふ工合で、畫面一杯に「珊瑚」を描いてその前に、ひれ伏す三人の像を物して主人に送りました。所が、琅汗洞の憤怒は極點に達して、しまひには、「横山先生へこの事を話して除名させる」と迄いきまいたものでした。こんな亂暴も極點に達し、「これではゐけない一清算しやう、それにしては、一つの所に居ては又繰返へすから」と言ふことになつて、速水君は京都、僕は奈良へと云ふ風に別れ別れになりました。そうして速水君の京都時代は初まるのです。

【小山大月「速水君の生涯」『美之国』一一――五　昭和一〇年四月】

主として新聞雑誌の挿繪を描いてゐた時代の芋錢さんに就ては、面白い繪を描く人といふ印象はあつたが、それ以上に芋錢さんと私とは何の交渉もなかつた。

私と芋錢さんの交渉は、私の小學校時代の同窓の友人横地信輔君から初まる。横地君も私も日本橋城東小學校の卒業で、岡本一平君、名取春仙君、仲田勝之助君なども矢張り同じ城東小學校の出身だ。

この横地君が清酒大關の番頭さんで、商人ではあるが北原白秋門下の歌人で、美術にも理解があり、特に芋錢さんの大の崇拜者であつた。この人を通して私は芋錢さんと知つた。

間もなく、それは大正四年のことであつた。无聲會が解散して珊瑚會が出來た。

平福百穂さんが中心で近藤浩一路、森田恒友、山村耕花、石塚翰、池田永治、名取春仙の諸君と私の八人で、平福さんの青山隱田の家で相談をまとめた。八の數は三と五の和だから三五で珊瑚會と命名した。芋錢さんが加入したのは一二年の後だつたと思ふ。酒井三良、小川千甕兩氏の參加はそれより更らに二三年後であつた。

大正六年第三回展を白木屋で開いた時だつた。芋錢さんは「醉李白」の圖を出品した。芋錢さんの親友の小杉放庵さんが、豫ねて芋錢さんを日本美術院の同人に推薦してゐたが、横山さんが芋錢さんの繪を見た事がないから、是非見たいと云つて珊瑚會に來られたのを記憶してゐる。

醉李白の繪に就ては横山さんは餘り共鳴しなかつたらしいが、小杉さんの推薦が熱心だつたので、その年芋錢さんは美術院の同人になつた。

珊瑚會の第四回展は上野の松坂屋で開いた。芋錢さんは此の時、芋錢さんの代表的傑作の一つと云つても過賞でない「百魔繪卷」を出品した。

この繪卷は横地君が自分の小使錢の中から三圓五圓と芋錢さんに送つて、三百圓になつたら何か描いて貰ひたいと頼んだのに對して、芋錢さんが横地君のために描いたのを出品したのであつた。横地君はこの繪卷を大切に所藏してゐたが、大正十二年の震災の時に新川で一旦船に積み出したのを、船の上で燒いて了つた。惜しいことであつた。

その後横地君が此の繪卷を燒いたお詫びに芋錢さんを訪ねたら、芋錢さんは機會があつたらモ一度描いて見ませうと云つて居られたさうだが、それは遂に實現されずに終つた。

横地君の芋錢崇拜はその後益々旺盛で、自分の子供の名をつけて貰つたりして、喜んで往來してゐた。

私は正直のところ芋錢さんを牛久に訪ねたのは、たつた一度だけしかないが、芋錢さんの御子息、或はお嬢さんの婿さんかも知れない、が大森の小學校の先生をしてゐた關係から、芋錢さんは御子息のところへ來る度に、屢々私のところを訪ねてくれたから、親しく御交りすることが出來た。芋錢さんの師匠の本多錦吉郎先生も晩年大森邊に住まはれたらしく、芋錢さんはそこへも御寄りしたやうであつた。

繪の方面では、共に珊瑚會や日本美術院の同人として仕事を一緒にしただけでなく、濱田四郎さんの三越專務時代に、濱田さんと齋藤隆三さんの肝入りで、芋錢十種、龍子十種の共同個展を開いたこともある。珊瑚會は大正十三年の第九回展を最後に解散した。

【川端龍子「珊瑚会時代の小川芋錢さん」『塔影』一五―一　昭和一四年一月】

「无聲會」が潰れた翌年、大正に入つて間もなくのこと、平福さんが中心となつて「珊瑚會」が結成されて、芋錢さんも私も、この同人の一員であつたところから、私達の交はりは初まつてゐます。

さうして、「珊瑚會」の展覽會を續けてゐる内に、白木屋でやつた時會場へ、未醒さんが横山さんを引張つてきて、芋錢さんの出品作を見せ、これならばと院の「同人」に推薦したわけで、芋錢さんの日本美術院入りは、全く「珊瑚會」が機縁となつたのでした。

「珊瑚會」は、その後、十一年に三越ギヤラリーで八回展、十三年の一月松坂屋で九回展をやつたのを最後として、自然解消してしまつたものです。

私と古馴染の横地信輔君、これが酒の「大關」の未だ若い店員だつた頃から、芋錢さんが好きで、月々五圓送るから、それが二三百圓になつたら、何か繪卷を描いて貰ひたいと言つて出來たのが、かの「百鬼畫行圖」で、惜しいことには、大震火厄に遭つて亡失してしまひましたが、和漢の妖怪を網羅したやうなもので、而もこれは着色で、一番まとまつた、芋錢さんの作として、油の乗つてゐたものであつたのにと、今にして想像する次第です。

【川端龍子「芋錢さんと珊瑚會と私」『美術』一四―一　昭和一四年一月】

牛久沼の蓴菜の水泥、それは水銀のいろ。生ぬるい沼水に手をさし入れて摘む蓴菜の若芽。その如く老いて愈稚拙のやうな、芋錢大人の筆技。その畫、その書。限りなく高貴な、超俗な藝術。大震災の時、渦卷く火焔の中にめらめらと灰燼になり、燒亡した私の秘藏であつた。『百魔繪卷』畫中の海中魔、山の魔、川の魔、沼の魔の妖魚、癈爪の怪、等の亂舞。宙空に飛ぶ怪鳥の叫び。百獸の怒號。人間ものの阿鼻叫喚。黒烟にむせぶ月の翳り。鬼啾々の洪笑。灰となり煙と化して地獄の中へ、

逆さとんぼを打つて吸入されてしまつたのである。

百年二百年の後には、國寶にも推さるる事も必然なり芋錢大人の最力作、惜しみても足りぬその名畫。大人の生前、是非その『復興百魔繪卷』の傑作を後世に遺さるべく依囑致し、畫伯もその事を快諾。何日か健康な時日を得て揮毫さるべく、約されたが、終にその時日の來るなく、畫伯は逝去されたのである。

『百魔繪卷』と共に燒亡した愛藏には、『飲中八仙』の二曲屏風。是は八仙歌の書を主に、暢達な筆勢を縱横に揮つた物ではあるが、伴ふ畫も又奔放豁達、良く八仙人の酒興を漲らした完璧な物であつた。それと、『辨才天女』の一軸、この辨才天女は右手に劍を持ち、獅子の上に立たされてゐた。畫の上端に、勇猛大精進、南無辨才天女、と云ふ二行の文字が獨特の楷書で書かれてあつた。この辨才天の畫も、その頃の大人の作品の中の快心のもので、此頃整理した氏の書狀を見ると、その事が詳らかに記されてゐる。なき子の年を算へる如きものであるが、これ等の逸作を燒亡したのは私の畢生の遺恨事で、震災さへなくばそれも今に遺存して、同好者にも誇り得る譯だが、今更どうにも成らないのは是非もない。芋錢大人に面接する度、その事を屢詫した次第である。それを謂ひ出すと氏は、百魔は消亡するのが本當だと微笑されてゐた。あの寛容な破顔、それも再び拜されなく成つたのは如何にも寂しい。然し二三の作品は未だ手元に所藏してゐる。それをせめての思ひ出として、永く愛藏したいと思つてゐる。遺作展でもあれば出陳して、同好の方々に見て貰ひたく希望してゐる。

百魔繪卷は失つたが、その繪卷の跋文の草稿だけは震災の時、不思議と氏の手紙等と取出したので、爰に記して置く。此繪卷は珊瑚會の第五回かの展覽會に出陳した事があるから、それを見られた方はその畫が如何に、芋錢氏の壯年期の代表作品であつたかを知つて居られる筈である。

百魔繪卷跋　　芋錢

三途河ノ婆子ハ今娑婆世界カラ來タ亡者共ノ衣服ガ澤山過ギルノデ其一部ヲ燒ヒテイル、其臭氣ヲ亡者各ガ特有ノ香ヲ臭ギ分ケテイル、夫レハ古今東西やんごとなき側ノ者ヤ、極々下賤ノモノヤ、又時代ト云フ大キイ亡者ノ召シタモノヤ、ソレハソレハ混雜極マツタモノダサウダガ、大體衣服ノ香ハ蛇ノ脱殼ヲ燒ク香ニ似テイルサウダ、此燒イタ香ガ地獄カラ吹ク業風ニ送ラレテ娑婆世界ニ擴ガルト不思議ニ又人各ノ衣服トナリ、彼ノ犬神ヤ惡靈ノ樣ニシツカト人間ニトツツイテ煩惱ノ火ヲモヤサセ、其揚句ノ果ハ又亡者ト共ニ地獄ニ落チテ彼ノ婆子ノ厄介ニナルモノダサウダ、其變化ノ目マグルシサハ丁度電氣仕掛ノ花燈ヲ看ルヨウダト云フ、此卷ノ妖精共モ多分衣服ノ化物ダラウト云フ事ダノ、化物ノ正體ハ一ツ目寺ノ一ツ目阿彌陀ニデモ聞ク外ハアルマイ

【横地信輔「芋翁作百魔繪卷」『美術』一四―一　昭和一四年一月】

大正三年に京城から戻ったその冬、平福百穂の家に集まり新しく会をつくるというので、龍子から誘われて私も出た。集ったのが百穂、龍子、恒友（森田）、春仙（名取）、千甕（小川）、翰（石塚）、永治（池田）、吾郎の八名で、前に記した旡声会の如きものだが、会名をどうするかという相談になった時、結局三人と五人、合せて八名、三五だから、〝珊瑚会〟ということにしようじゃないかと決定した。

百穂はその頃文展に出品しても優待されていないし、龍子もまたどこといって日本画として出品もしていなかった。また他の連中もただ日本画も描けば描けるという調子だったので、いたって気の張らない、いずれにもこだわらない会となった。

第一回展（大正四年四月）は松坂屋でやったと思うが、存外評判がわるくなかったようで、芋錢は百穂の希望で是非入って貰うこととなり、毎年続けていくうちに、耕花（山村）、浩一路（近藤）、三良子（酒井）などが参加した。

芋錢は雑誌や新聞で漫画風なもので名を知られていたが、水墨画を展覧会に発表したのはこの珊瑚会がおそらく初めてであったろう。ある時横山大観がぶらっとやって来て、芋錢の作品を眺め「これは大した画家だ、絵は兎も角書は実に見事なものだ、美術院の同人に迎えたい」ということになり、大観の一存で芋錢は一躍同人になってしまったのである。

また、百穂は文展で次第に名作を出して賞をとり、龍子もまた院展に出品して院友から同人に推挙されたので、作画に多忙となり、幹事をやっていた大関（酒問屋）の横地信輔もついに珊瑚会に見切りをつけ、大正十三年に自然解消の形になってしまった。

【鶴田吾郎『半世紀の素描』　中央公論美術出版　昭和五七年一月】